

地

二四九



木曾路名所圖會

四

915.5  
327  
Vol. 5

未曾路名前圖會卷之四

同上  
祿

高崎	佐豊長者趾
金讚社	岡部忠澄趾
余加野	上聖武菴嬢
佐豊舟橋	定家卿宮
桶吹川上	新町
熊谷寺	佐豊順世蹟
普濟寺	岡部原
竹實	鞭音堂
糸八幡宮	熊谷直實古城
上森尾	大宮
針替村	戸田川
鞍板	平塚祠
菟島山	富士推現
根津社	湯鴻天神社
縁切坂	大宮原
燒禾坂	神樂坂
縄荷社	太宰府
田原社	大宮
明神社	水川神社
王子社	久下谷
神明社	鳴菴
王吉楠荷	佐豊長者趾
調神社	佐豊舟橋
慈吉楠荷	佐豊順世蹟
高崎	高崎

妻志縮荷

聖堂

日本橋

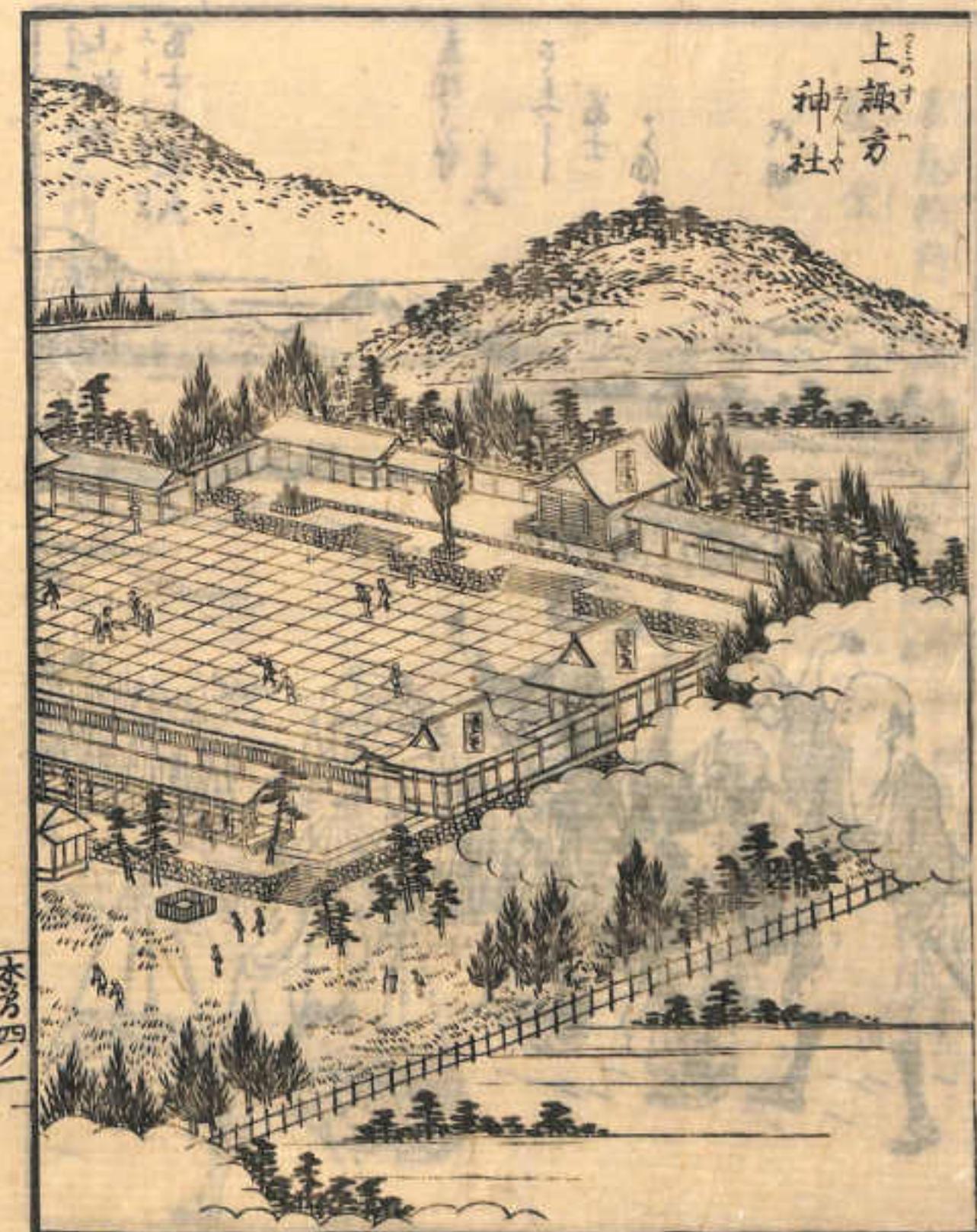
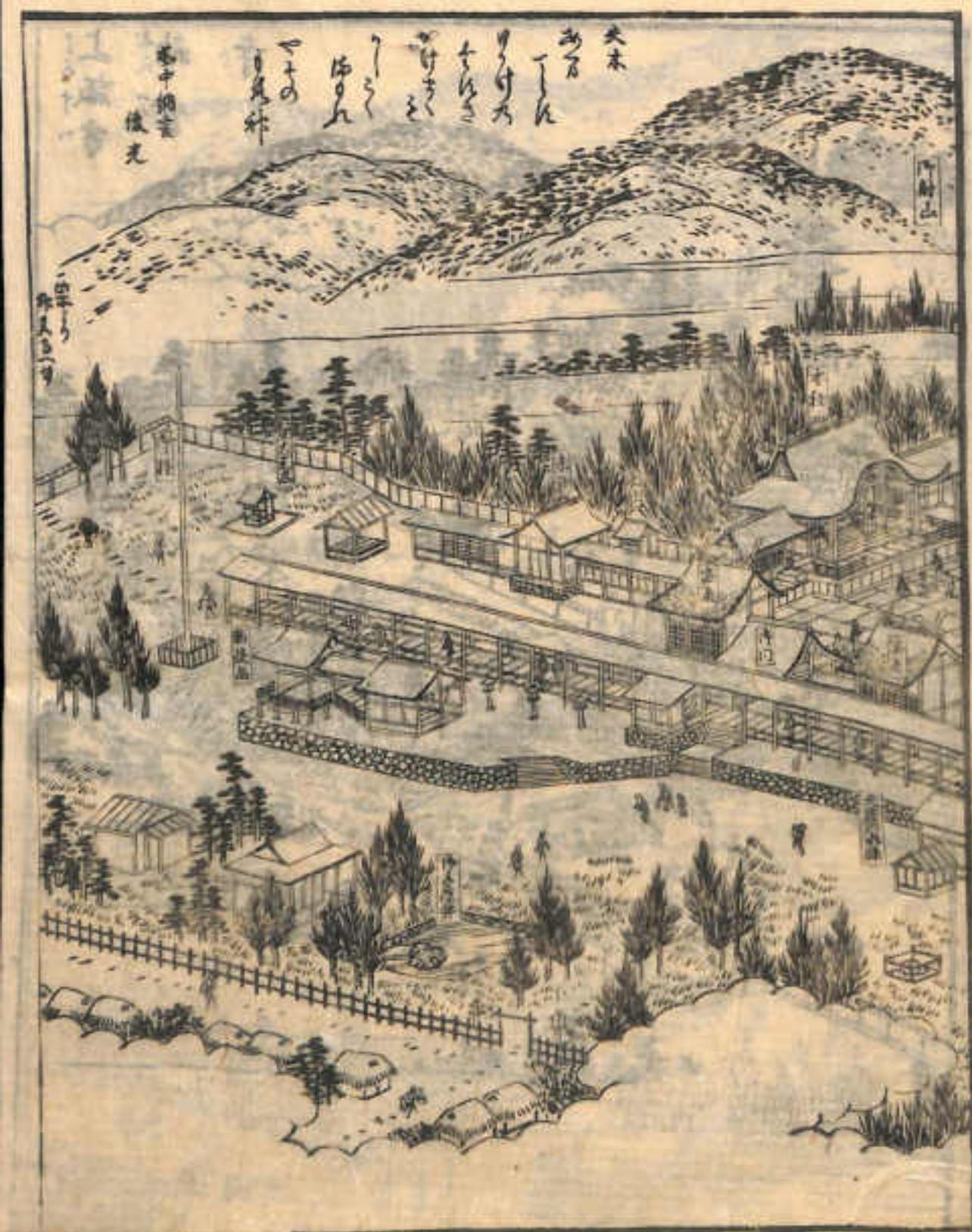
牛頭天王社  
主社八木

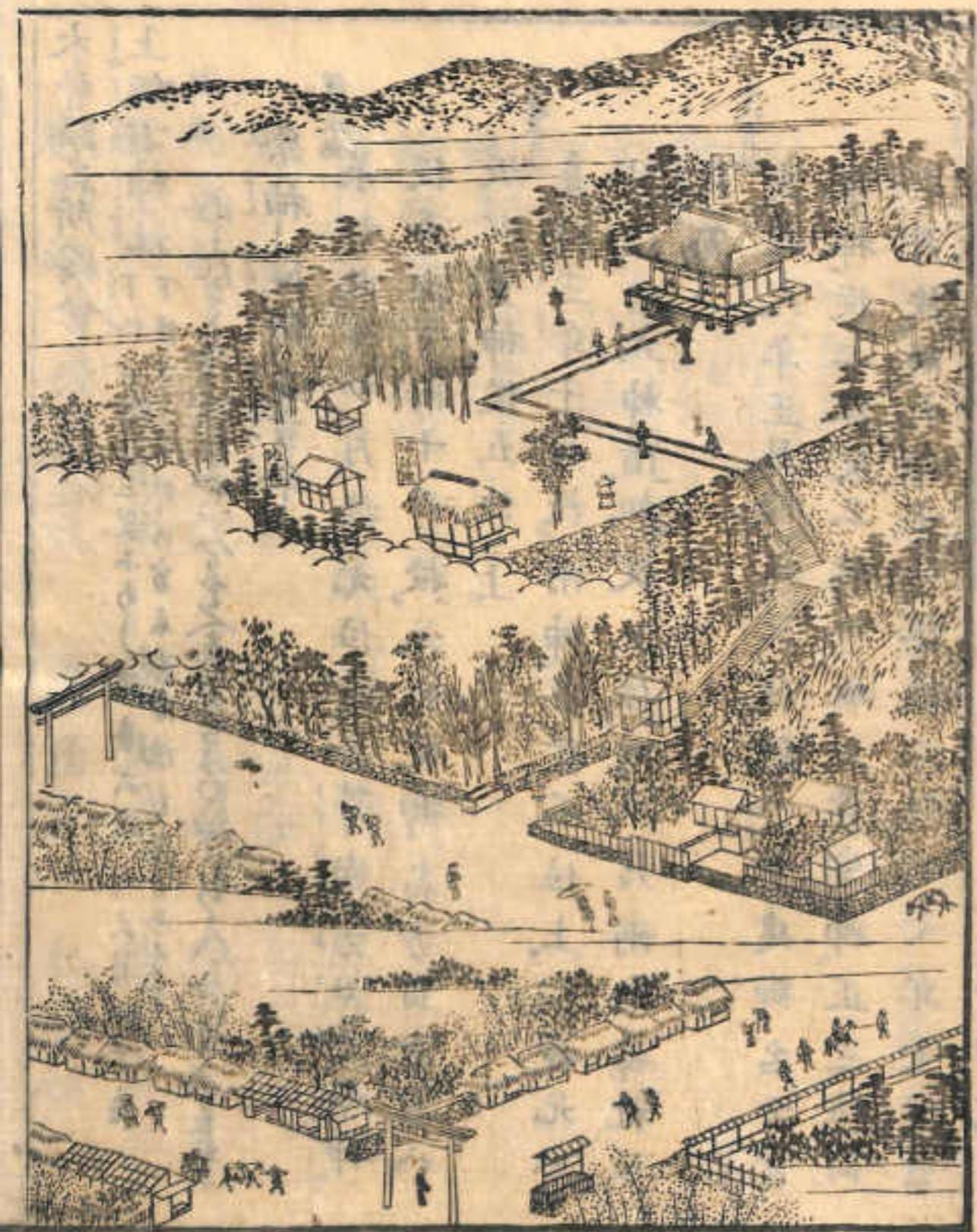
櫻吉出

人志社

本曾路名前圖會卷之四目錄







木曾路名所圖會卷之四

上  
神方神社下落方より三里下あり延喜式名神太月次二度

新葉

あたから湊波のあらみをもとすと育ケ神のらひる

宗良望王

祭神 健御名方命

舊日本紀

嘉和九年四月授无位勲八等南方刀美命神

從五位下同十月授无位健御名方富命前八

坂刀賣神從五位下

天德實錄

嘉祥三年十月授兩神並從五位上仁壽元十

月進兩大神階加從三位同八月兩大神祝預

坂刀賣神從五位下

三代實錄

貞觀元年正月授正三位勲八等建御名方富

命神從二位從三位八坂刀賣命神正三位同

二月授兩大神正二位從二位同七年七月當

御供所

郡水田三段為南方刀美神社田同九年三月進兩神階加從一位正二位

云

拜殿

南向美祿神社之神也

神社之神也

御供所

御供所

文庫

御供所

祈禱所

御供所

繪馬殿

御供所

護摩堂

御供所

前宮社

御供所

捕井社

御供所

藤島社

御供所

瀨大社

御供所

大歲社

御供所

荒玉社

御供所

玉尾社

御供所

千野河社

御供所

鷦冠社

御供所

醜藏社

御供所

三十九間廊

下木三十九所の末社あり

所政大明神

賀燒社

御座石

御飯殿

相牛社

若宮社

太西御庵

山御庵

御佐ノ田

闕庵

八釦社

小坂鎮守

鷺宮明神

萩宮明神

達屋明神

酒室明神

下馬明神

御靈明神

御賀摩明神

磁益山神

義金會美酒

神殿中部屋

長廊社

以上一棟廊下之側土鎮座也

大福殿

御柱

大黒天社

辛社の外より

勅使殿

六角井

社内東方

御手洗井

神樂殿

日東の方

五重塔

六角井

社内東方

釋迦堂

勅使殿

御手洗井

金堂

御柱

御手洗井

大昨堂

御柱

御手洗井

撞堂

御柱

御手洗井

五重塔

御柱

御手洗井

大昨堂

御柱

御手洗井

神宮寺

御柱

御手洗井

齋社

御柱

御手洗井

社美臺

御柱

御手洗井

三重石中

御柱

御手洗井

小供

御柱

御手洗井

麻肉卷

御柱

御手洗井

様形

御柱

御手洗井

而り遠近四方より諸人多く集ひ其祭式處をさづり爰不吉集

御柱

御手洗井

申候。モ不思議ナリ。幸徳御瀬八榮幹御作因  
は鴻根入松御射山湯に清濁等あり。清瀬も信濃も日幸  
やく寂地もして寒ま陰に國うちゆ。諸方の幅乃手をもよみて  
かうて才三日焉爲行矣。予四五日の頃上の諸方より下れ酒方を  
カ小模幅立々をうたうる本名うどん通する。や承の上ふあとをく  
るや。之種例年必うす奇怪の事これを御瀬も又神光とも  
よじ御瀬酒も。後人ひづれ御瀬うな肉を御瀬也。是く年に  
きて御瀬のうる上の頑方もある事ハシテ。是トの頑方の方ふ  
り波ある所をかつて其頭ふうて奉の豊山がもとより御瀬翁  
文字ふけた或ちゆじ幸徳  
和田へ山路五里八町飯方の駅一千軒許もあり。高人多く旅舎  
小出女あり。夏秋かわあれどもまだ富はれて寒列し  
宮北の坂の下で小瀬在し  
日暮正月初日小瀬一色

下諫方

天孫降臨時、大己貴神第二之子、捷御名方命  
欲拒天孫、於是經津主神遣岐神逐之、捷御名  
刀命逃到信濃國諏訪郡、迫甚而請曰願得此  
郡以爲父母之讓、不爲天神之咎、而作吾居、則  
吾豈奉背天孫哉、因茲經津主神以諏訪一郡

附于捷御名刀命是即諭方明神也  
神皇正統記

誠方湖

勝大

勝

勝

勝

勝

勝

勝

勝

誠方  
神宮寺

高鷲城

誠方の湖城

ごくれれれ

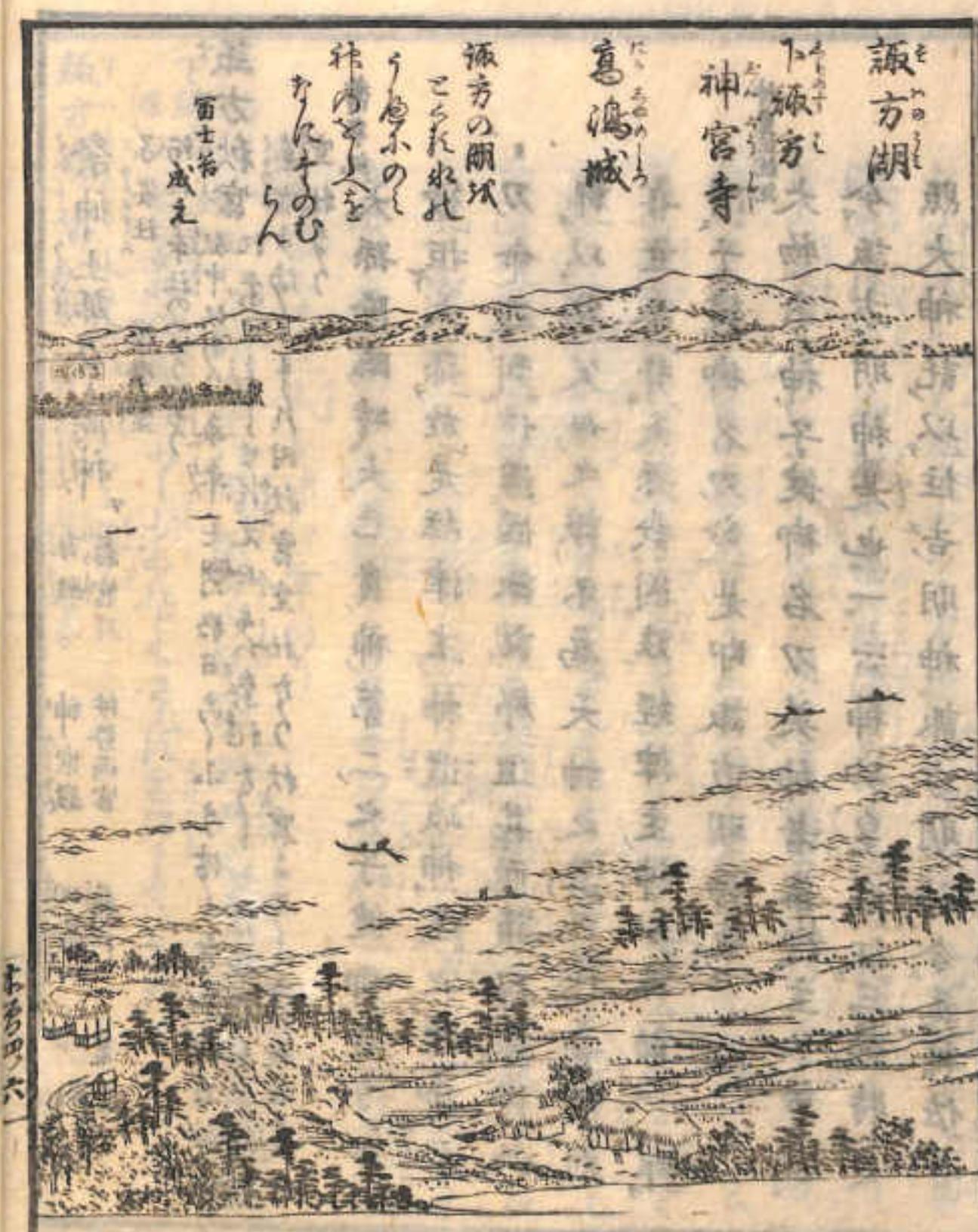
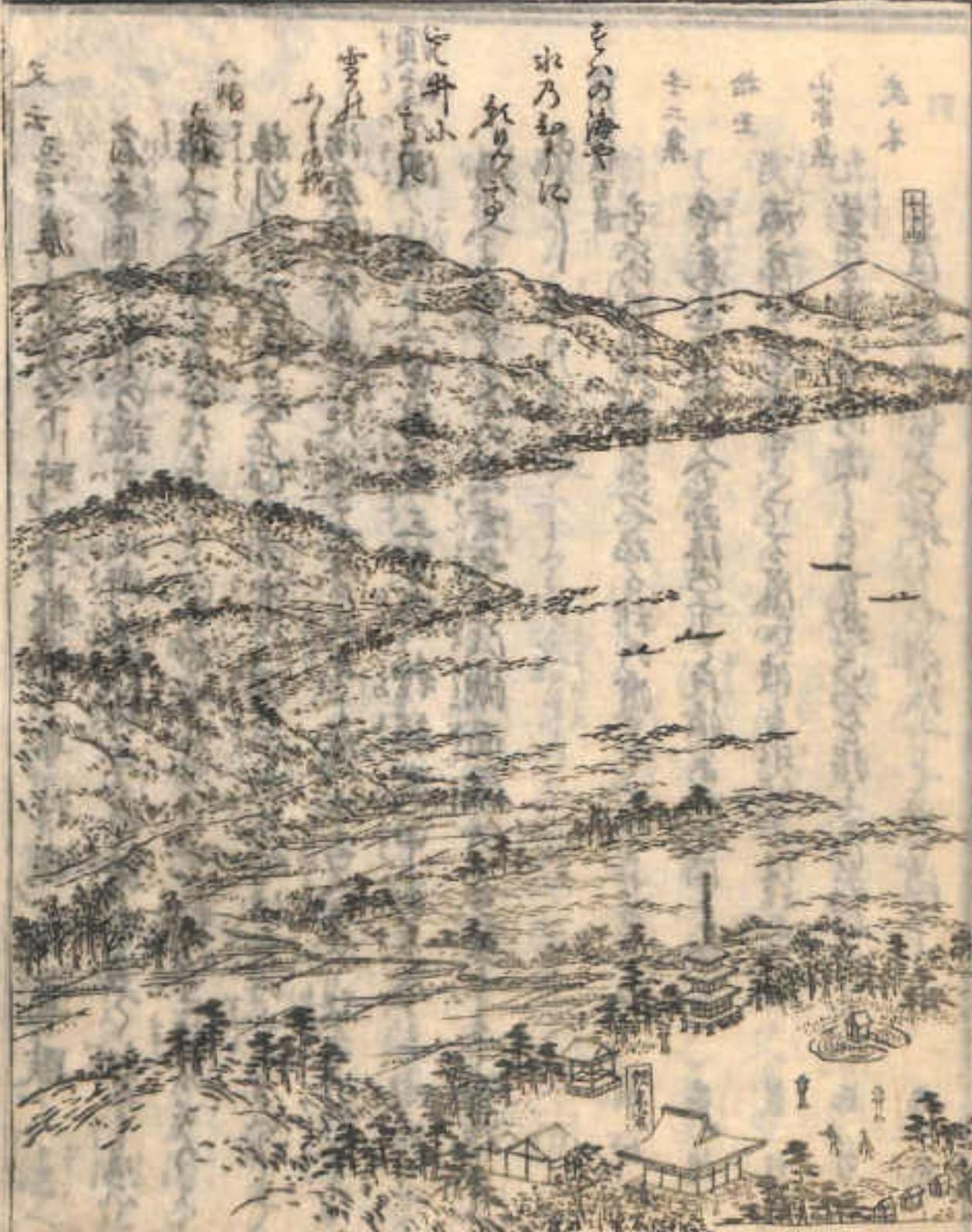
うれふの

れのよし

富士若

威え

あらめり六一



又云信濃、諏方、下野、宇都宮、專狩獵供鳥獸

諏方湖

名も「下の諏方」此街道の駁みて精舎多く知下流

根りえ乃足とし湖の中に温泉ありてけ音のあうにて

湯屋の宿ありて宿を有す其外よ底のあくまく泥中水

須波之湖

周十一里餘亘三里许裡鋪毛甲あり今と水治つて

中之湖

いあすよ疊する水の發去そのて湖面風のうしてよう水鏡

信濃川

集

拾玉

山家集

文木

佐久

佐久

13

まくいや信濃の境に至分て尾よすの歴うむ後

親陸

は水すくみてはなとて七石をうちて先づふ浦くあうく

民家衆一四方少くふくありて風色斜きに瀬又あく有

て舟棹がそれどる早舟一漁舟乃外取小舟もと拂ひてゐ

湖そぞれすより早より船もとす早舟を遙聞なく舟一面本

ぬそぞれ寒風すより早舟のうち年月のうちあくと作をはじめ

て水のうをよこし水の厚さ年月のうち八分す一年とすあく

と水のうをよこし水の厚さ年月のうち八分す一年とすあく

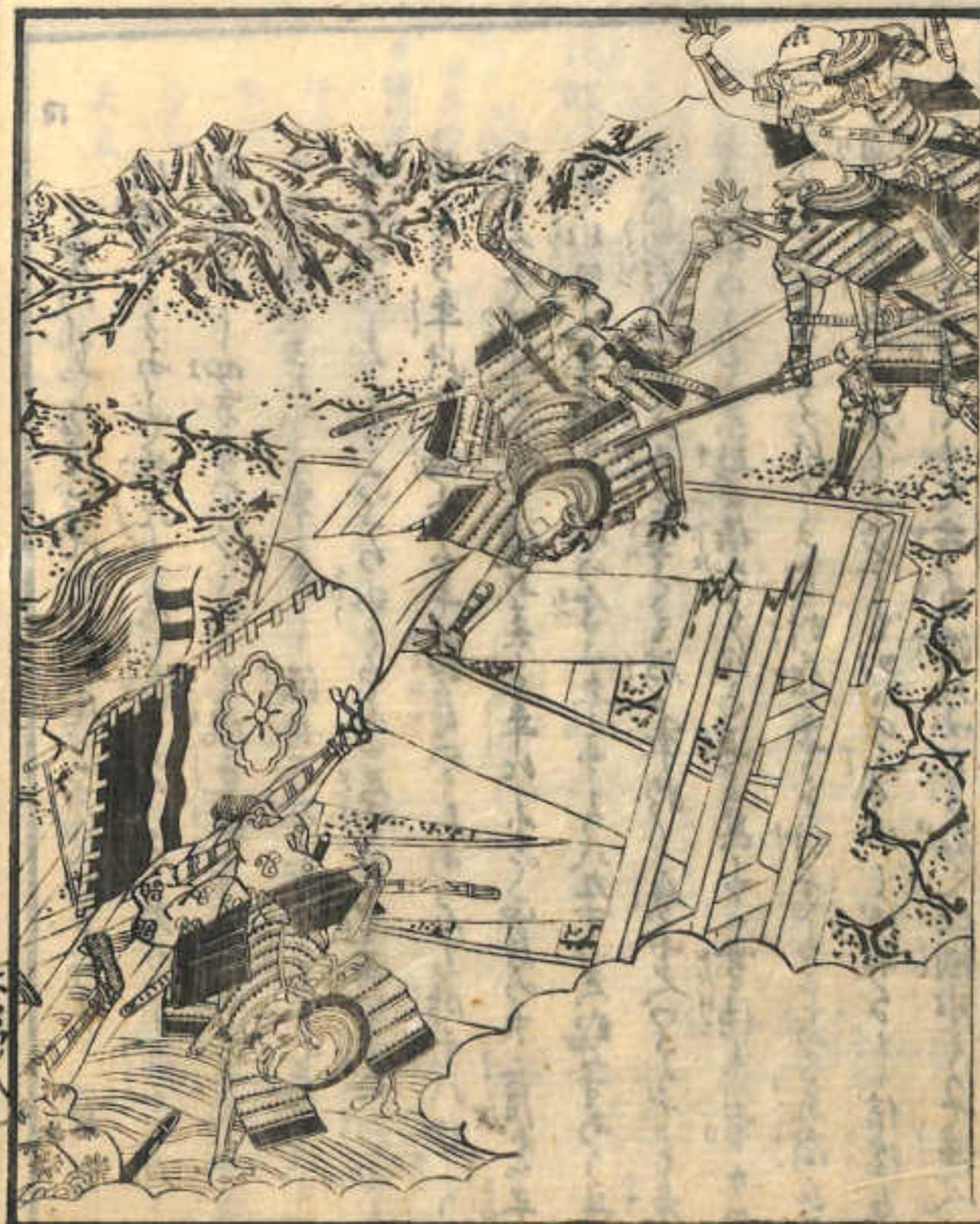
と水のうをよこし水の厚さ年月のうち八分す一年とすあく

と水のうをよこし水の厚さ年月のうち八分す一年とすあく

と水のうをよこし水の厚さ年月のうち八分す一年とすあく

本多四七

武田勝頼  
義勇廟を  
自負して  
神佛二教  
せ代子達、  
詔を下す。左  
忽ち坂橋崩  
御見幸事  
あれ源方の神  
坐す。トモ  
津トテ



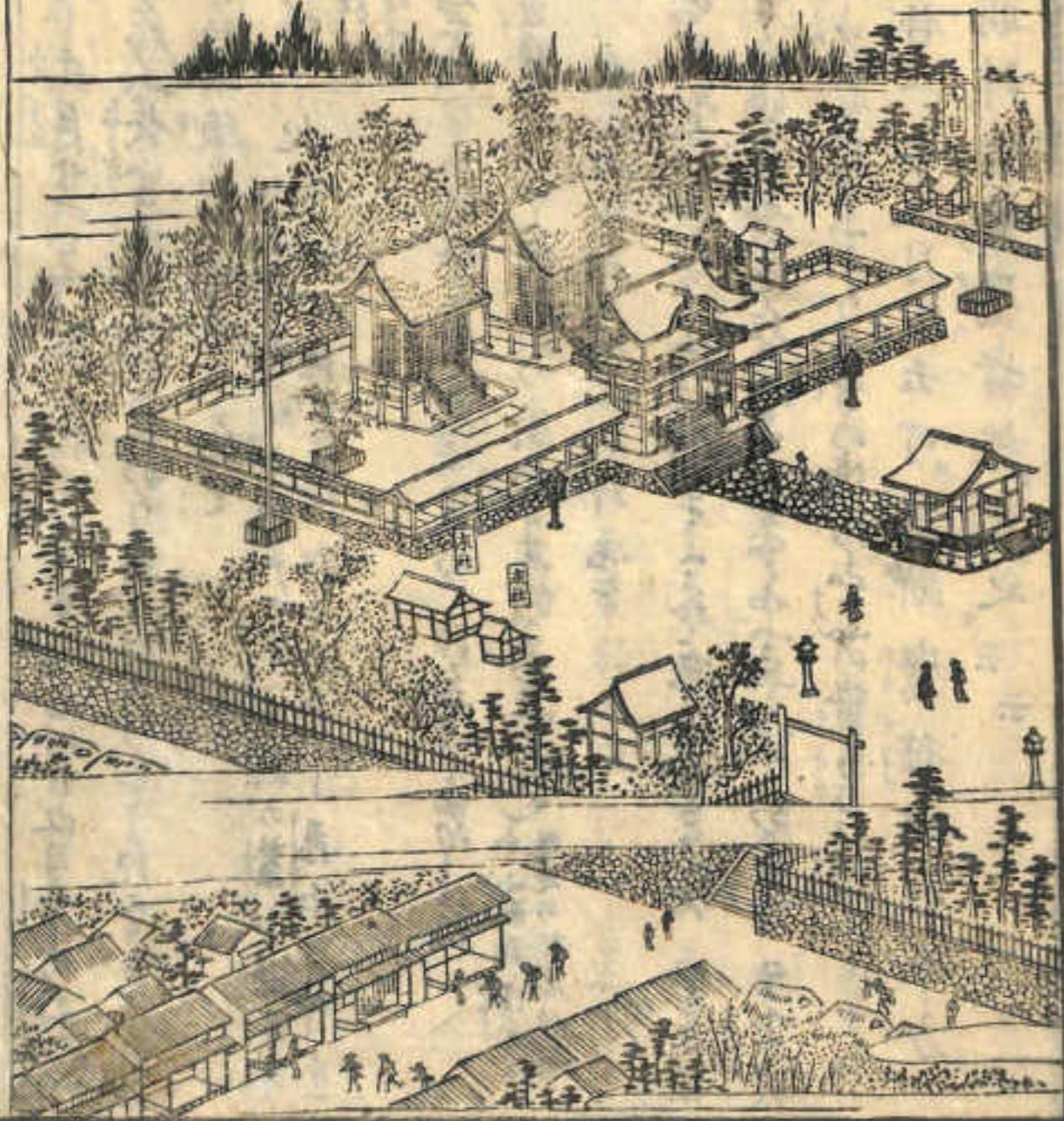
物の下本網を引くを水引すより又奇異の業なり漁を前長く  
うちて其前うち網を入へて其先がうら行ひ竿を持てて水引ら  
ずは不よう次のうちたる所すてあみを送りてあつて幾回もいり  
あくくふうのうして網をかねくもうて魚をあしらへられあくく  
きる幸とぞばしてそまよ漁人をもどろさせばこそ又水引ら  
漁をふみの腰より長尺竿引抜むるあるうて首へぶるを竿ゆく  
起とすなまやせりう漁を沈没の人あまた畚よか水鳥を入ぐれの上と  
り小鷦なく而もてて屢を擣とり  
城下の海がさうそこ里小あり 諸國因島守及居城へ二万石  
船泊あり 三方より水も陸の家一がうち入にあり 其家より  
繩れ玉附もくく背左右を拂り奉よ 携あいは川より入り  
出入自由 かくて山中と山中助助情幸能強をとり  
濟岩士山の鉱うけりかく  
本 漢波のうみを舟をかみ立たるほく日ひよ始て之の 大蛇去井氏  
すへの海衣、傍身をそれひる士のうもあ處にほづ

はか寺一洗志櫻宮天皇の御歎とも又弘法大師より山行とも不  
れど人にはあれば學くらむちうへ  
詠歌温泉モロコシの歌多所あり猿人ヤマトの歌中の人多く平安  
を源川村本の難人ヤマツチより身薦アマツシテ  
あ夜の川ナガハシの川カワの流れて身をもと  
ト源方の湖カワカミをあひる上源方の湖カワカミ  
うそ舞アマツシテ本見ゆる行程升入室アマツシテす  
雪化粧士アマツシテ水ミズあるうみ水相羽アマツシテを  
天龍川アマツシテ水源ミズナミあるの湖カワハシの源ミズナミ天龍川アマツシテ行アマツシテりてあ瀬アマツシテ天龍川アマツシテを  
其の山カタマリを守アマツシテ巣アマツシテとよ湖カワハシ良アマツシテあるがすと  
ハハダケアマツシテふられ小田井アマツシテのううり思アマツシテゆる八坂アマツシテのとくり何アマツシテも  
喜アマツシテ山カタマリたりきの湖カワハシ乃めぐられ小川アマツシテふうぐひとゆ  
其の山カタマリあふあうてアマツシテのくアマツシテがくアマツシテがくアマツシテ人アマツシテかくアマツシテ墨アマツシテにワアマツシテだた辰アマツシテの  
地アマツシテの人アマツシテをもと公アマツシテ赤魚アマツシテ下アマツシテ北アマツシテ彼アマツシテさくら木アマツシテ櫻アマツシテを  
國アマツシテ在アマツシテよ燒アマツシテ却アマツシテ幸アマツシテせよ運アマツシテ一發アマツシテ五アマツシテ亮アマツシテいアマツシテきアマツシテふ

御射山おとこやま  
射のる  
玉柔たまじゅわ

禁  
御  
内  
裏  
天  
守  
閣  
大  
内  
御  
殿  
御  
内  
裏  
御  
内  
裏

道  
院



禁  
御  
内  
裏  
天  
守  
閣  
大  
内  
御  
殿  
御  
内  
裏  
御  
内  
裏

下  
諏  
方



毎や一文月廿六日卯射山狩ぶりでゆ一て日廿六日辛うおふ

のを終ふ長富五領家さのゆうをばはうとくをみて書

うりう神戸猿屋の神幸とくとく

保屋はまくに 諏訪郡御謝山神戸の東ハナ嶽の御嶽を御奉神

立所を  
保至社去

社中抄 志あ法なるはせきにも風生ひそよくはせりありされ

顯服去役やのゆう所の圓す有甚前よりす

今小縣郡御嶽  
御名の地名也

文永二年九月十三夜野鹿を

清古今

始きぬふの夜のすたのね風ふよきを席も事もよ後

御留を店

少てほとけやれきなみきよゑゆまやくろあすん

清古今

篠草の鷹取ふよき風方の御作の事の御あるに備へてあん

東鑑 建暦二年八月記云可禁斷鷹狩但於諏方

大明神御贊鷹者被免之云

五三四ノ十一

信太社百首

風祝部

袋附子

志かねうる本多原の桜候小笠風のはすまたあはる

朱雀院

信波の圓をきらんと風早に所うりよて風方明神の社小風乃

ねせうよものとてうれを奉れ始末済く物小井屋くむく

百日の間尊室をほくめくはまく風移すく農業を

もめふよしむすりせのほくすんはとある日をも見へし先

はまく風納づくを縁賴の故此詠すも

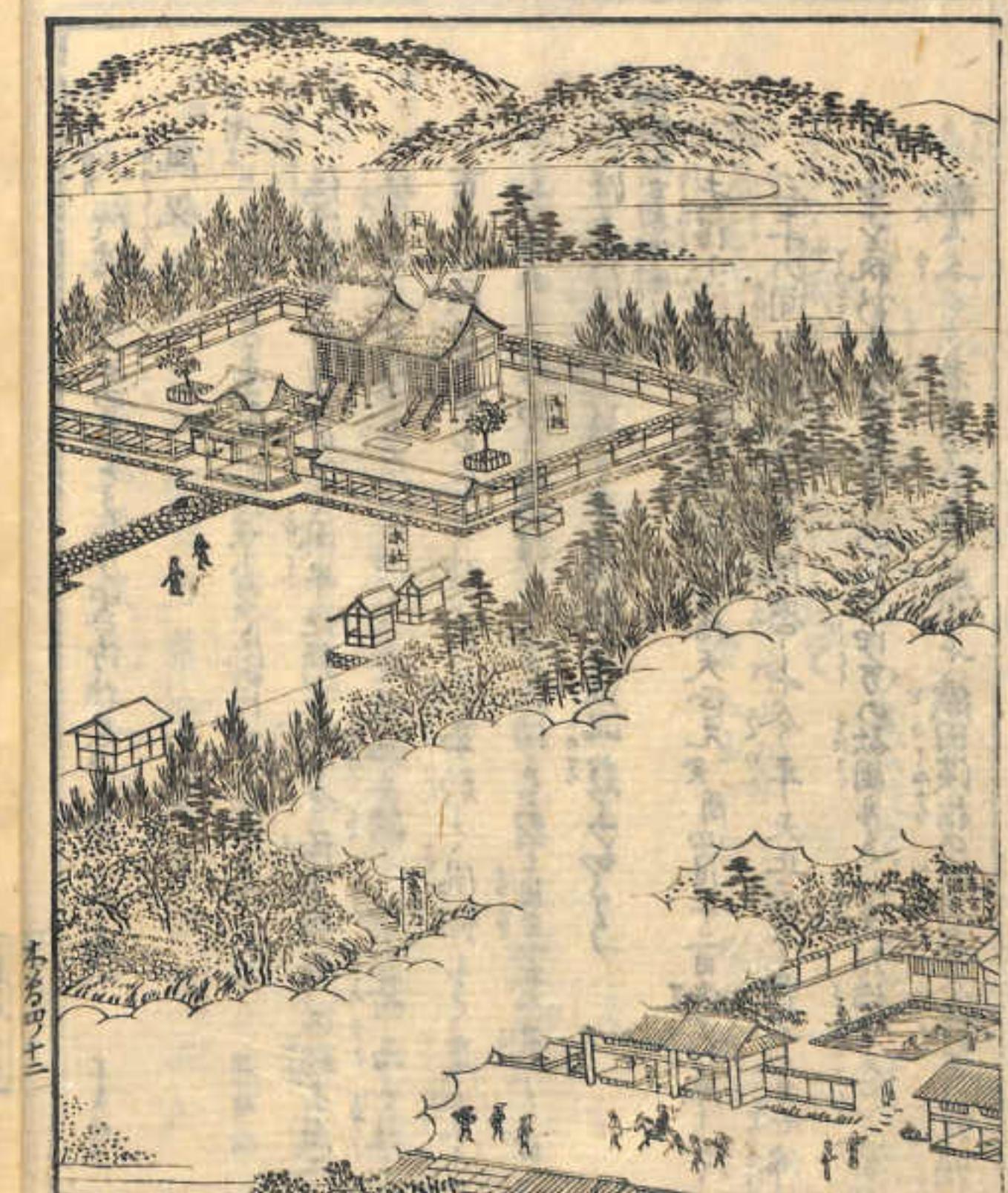
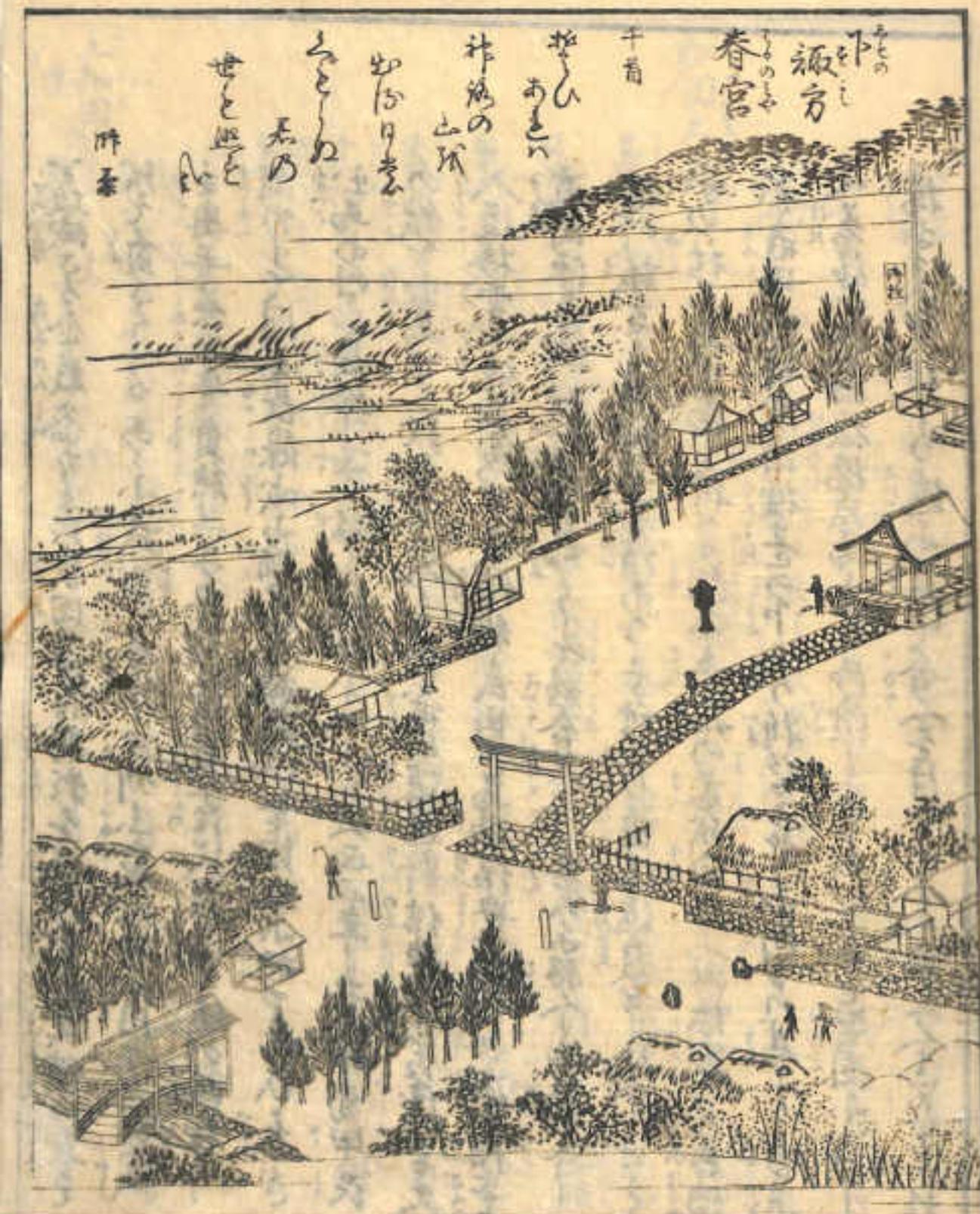
物類筆方泰指應秋興

去程小法性院大僧正信去馬天正癸酉四月十二日逝去歸

三年の間も深く此身が陰密して今年天正三年四月十二日七佛

事と執り是なるよりつゝくは方の故國を此身が侍せん心と置

離ふきう者多くを別て織田信松の嘉永家合併あり賜頤



と攻滅する企図密を主六武田の臣勝利を誇め常以其備の意を

爲そ責ふらるゝあく小武田の幕下三列小家三方の内側よりの城

主奥平美地守貞能其子力八即信昌去後八月より遠例院松河

隨坐して同玉長條城小摺越よ勝賴は幸甚不若す多ひもさき

出馬あく長條城を攻めれども天正三年五月中旬甲戌

の鉢と出馬せられむ徒手で生じ武田道達軒信連穴山信高を支

入道梅雪一條在属を支信龍武田左馬助信豊武田兵庫助信寧

直因源在属の尉信綱を始めて組合其勢一並みふ個人とぞ聞べ

伊賀諏方大明神小糸清あつそれより率小進度をほへて多く

の社小馬が向ひ於ける隱小高居の本城也移下附伝玄ようお侍

ふ毛利の持陰構櫻臺の下より折るこゑを右側うれ甚もうる遠

へ毛利ひづけ板橋成馬かく海波へあふつてを堅固小石

橋ある中程より邊小高て舍人をけりや小人衆三人上りまどれ

本居四十三

御馬速物との特小勝頼馬上の達者坐て同士在院を曲て駿越と

アツマテリ御泉小池もすうとあうるふより今度の合戦のうわぐを

雜人ともハ松語多るモ理之物く見る所

新國太嶺 下の諏方城立て落合橋あつは兩谷とも諏方坐てあく小武田

義盛の塙塙あつ落合村立場すて是より正則わらひ保原町に移り

又廿二町と號て和田傳ゆるこそ伏崎の峯もより空缺ぬなり附坐て是より

見ゆる通はぬし東峰は在むとく二月の末まで雪ありてをく地打基と

あひ門へ崩れりて坐した東峰屋村がいは村立場の重慶あうこれも

上和田、ま里六町へはふ中は名前、所謂九輪草下毛丸虎尾町

鈴木系は音陽をかせうらもと茶花見也れ

旁アリ蹄馬をちりやわ田岸

芭骨

長久保まで武田の駅の下に八幡の廟、源あつ和田義盛の

雲城をもとより宿の出ゆよあい川橋あり和田が余をすゞ

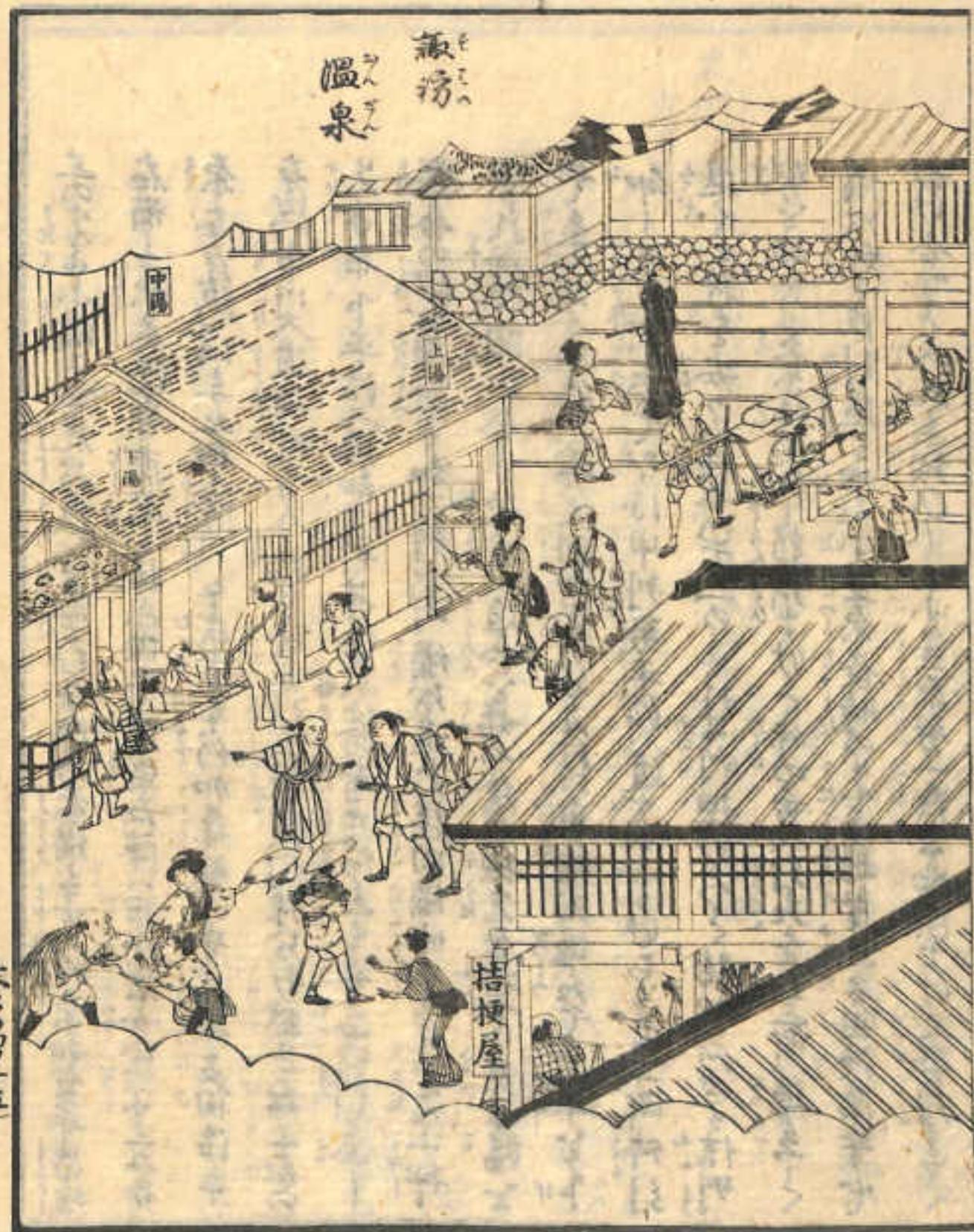
長窪のあはれ門塙太門付より備道より遙かある下窗立立陽  
竹にて雷坐り、深山に村青原これまで小林敷おり後田川小入檣小  
檣十間许ありありは深さわ闊十丈を車と之門前もろ高き

大門付 小笠原の合戰ありてとも有り  
大門付 小笠原の合戰ありてとも有り

大門付

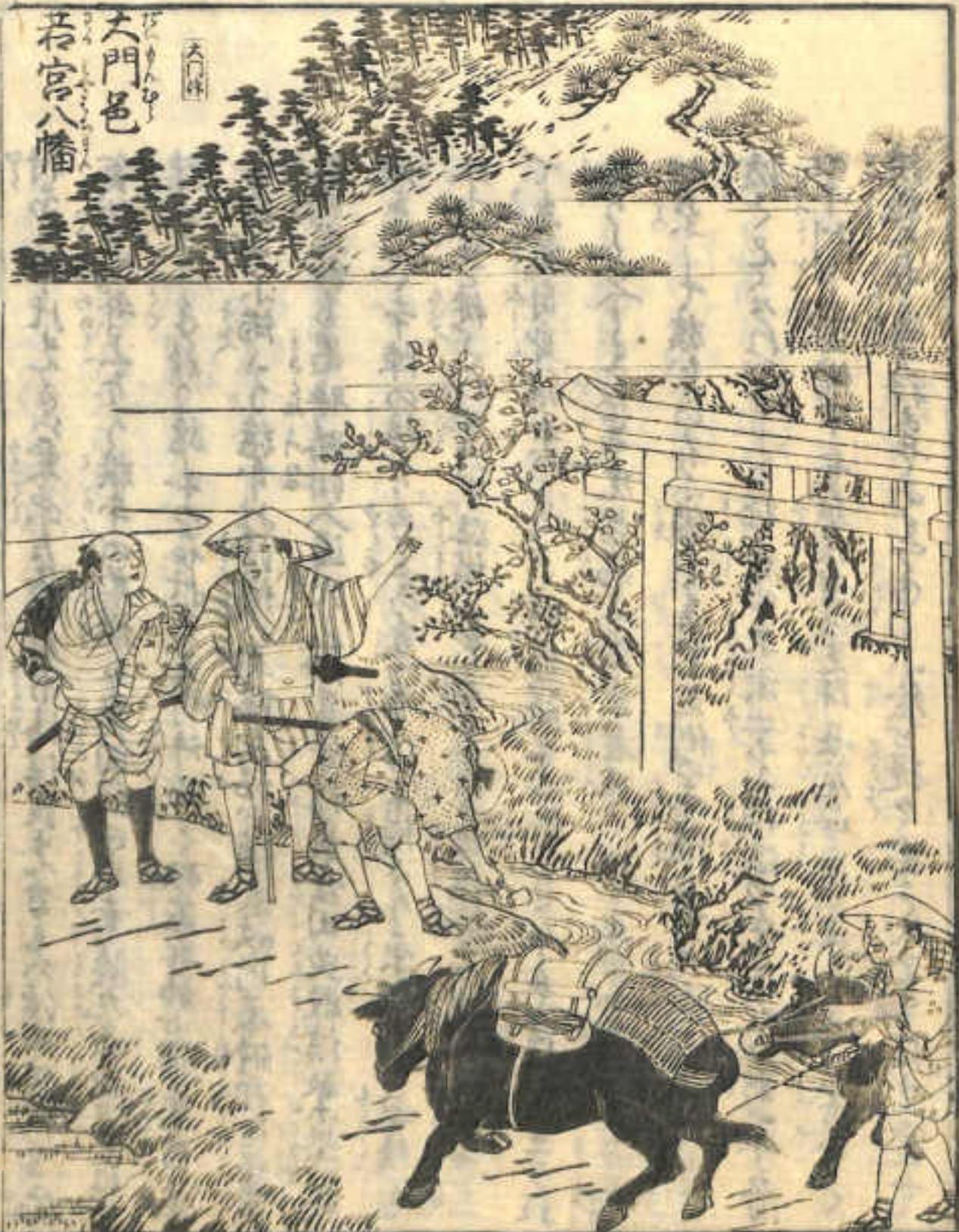
小笠原長内付上義清西家軍勢一萬三千餘人太門付押またふ  
さき國家の軍勢も付おどり维せやく其附時信小室山内脇正松山  
十尋を備あんをもてく物見よ御付ね矣二へおほよき強打トゲ  
がく序くやけるハ小笠原村上西旗本もく戦ありて其勢一万餘と相  
思て然も後小備一三番より軍と多く懸り维せやくら信害  
左もほ半方の備をばせとてハヶ嶽の禁軍甲列通権が衆に陣を補モ  
法勢の門足狂隊相模國備中守門子恩彦十年甘利カミリ更に加内カスく一乃  
先小備まで二の鼻公利マツリをひく内多田津治嫡子前庭マツシキをけら文  
板垣タガハシふか門と第一の備の先まゝは安間三重ミヤマの尉を假名無殿マジナムヂンみ加内カス

三の先手小備を虎昌後アシマサヒロと立壁タチイシを今陣の先備と士大將原加賀守昌俊  
右備を原美鶴守虎亂小幡コノシタと謀守虎盛左陣シラシタ市川未女正一子二九  
原与左近シロクニ與之布後備アフタブを武者奉行加藤驥河守昌頼多田治部  
在鷹市川入道梅印アラカミうりゆう處アラカミ信忍勢太門付公打越アラカミく村上家  
先手布下平治入道和十軒其外不徒の者せぬとも寄正の列アラカミ三  
懸合の次と相計アラカミく犁軒アラカミ十軒備公進先模國備中守アラカミケモ先小押  
かね兩陣閑アラカミを令く砲弓アラカミ迫合と始め篠の穂先を擧アラカミて互止場と  
せ争ひたる平治入道父別の者たゞ自給公退みて士卒アラカミトケ  
か一真先アラカミ小突てかは甲列勢平治入道が勧アラカミ小けじもん一門付引  
退くこと舟を安て度因アラカミて二のそれ甘利押アラカミつと勝をめぐる信列  
勢とあらえふ縫アラカミ十軒公試アラカミけく備の方へ引アラカミを武所退アラカミて  
備公私アラカミて引退く次小笠原長時の生年略豊山多田津治守アラカミ也  
群々食アラカミく入札生残アラカミ一ヶ小笠原勢一萬本城アラカミいすけ大勢付まく



信例一方の先鋒兩度共小うち負ひ。且は之將義清大を越え、我旗軍  
とまじく傷敗を一死も免せん。種ひがゆく押立と安間が勢ひて  
両方主ふ後兵へあくと必至と戒す。信例勢は多勢とし大慢義清  
一派半数と突崩すと轟ひかれて進せば安間が勢ひよけく  
四度躊躇よ崩れくと衝突引退く二の身も備へ。飯家義高士平  
勇て村上勢本宮の兵大將小笠原右馬助長時木牌を取て義高  
の勢小弛合せ退り五つ内城す。其時旗手の元より備へる原加茂も  
昌後桂翁が突入するや妻手の方へ備を押す。氣合に將勝信自ら  
来牌を多く旗手とりつく左の方押す。原加茂を守つ備と左右  
より砲火中にて桂翁本宮と突入するの字本山う井の字み敵兵  
突ねる。その信例勢勝信昌後兩備の援護小役走して内山  
崩れく敵乱を先手の二備を犯して追兵を限て小印と揚げ其首と  
おもに恨面一千七百廿一級うち味方令状處に者底を殺しう者

難兵合を三百に林三ヶ村  
長瀬信玄の軍記より  
蘆田まで一里半は驛の民居二町を有す  
其餘力々小散在し  
石荒坂  
上の方へ七里出間坂道あり  
石割坂  
坂より遙く妙義山也  
壹月まで一里八町芦田何某が城跡ありは駒小眼茶と云  
傳世平右衛門と謙信とは前もく合戦あり又根津村へ根津  
甚き傷が居たる所あり



今朝の故の備速もと中手獨りとよりあひて合戦を持て持て始く  
 商家との取合形と云ふ基備の炮法處をとせやう原ト怪ケヤクタ  
 故成程合戦を持て備薦と相見くひ人殺を六千の内かとせやう  
 勒くニテ又准先も若き馬内歩とせば(ト)セ申て勝伝敗等ニテの  
 外すこゆまがうをまんとて山辛と連々られ備の高儀ある勝寺は方  
 備の立柱を悉く演古して京虎ソシ勇特ルをせよ味方へ一方三千  
 錦旗今日半刻ナテ鬼角にて特別を極ム坐六方の吉列不休  
 着元別説の大將坐味方勝つさせなばにと殺せされ御とおと庄  
 船と江舟を弱定坐方の赤の勝利と名作やせばははうは一ノ槻  
 中生うらあくの儀を立廟ノミく陣を轉翼小定らるは先手左  
 右の方ハ小山田備中守信例先方の相本市彦湯尉室厚基八芦因  
 下時も立趾平尾光尾耳取後路平原左と那内の小山田彦湯尉  
 信名先方久長窪原鷹尉小者基八佐尾五郎左鷹和田福良内

村あり中は先を栗原左馬の尉富澤信良を方々へ須田達房も富

賀綿内井上から旗本の本備も真田弾正忠幸薩摩と慶次これを  
禧本と。多野う禧本の右は方並町許陽く飯富兵船が浦虎局是  
と淳吉小備。う禧本は後備ハ馬場民ぬお前京政内益修院昌豊  
日向大和ち昌時勝沼入道穴山伊豆守信良武田典厩信教。此六頭  
於えのく幸陣の邊よりらすの方へ虎の本備。う原加賀ち昌隆も  
九十騎と從て引下りて歸備。是をすうる越後勢も越の九備も立  
て。赤虎自身禧本は多く晴信の旗本にお合せ今を残せよ。乃れ  
御りとつとも飯富虎昌馬上先武者凡て一千五百人赤虎の寄術  
が率して旗本の右小備を立壁。先例の本備もて馬武具旗損あえ  
渡さん。それば。うを福勇の赤虎等よ相違の事無かり。那で十旨  
の年刻小山田備中守越後勢の先陣長尾正永うをせ玉小秀令く  
猪砲をす。邊の行轅をあまめく。小發と提々寄く。今う。伏先登也。

攻城よ。越後勢。被ひて二町許。諷ぞ引次本連に。ふ城守柳原和泉  
守安國上。従ひ甲列の左手小山田左衛尉と戦ひ。一ヶ小山田既小戦  
而く武門洋引退く。是を見て栗原左衛尉。従ひて敵を殺す。門  
金を。意のを鼓を打きて。村櫛。近江の。備半突く。が。財。小。赤虎の旗  
半よ。揚。奥。火吹。主。也。太將赤虎自身。宇佐神社。強河。の。慶勝。試。連て  
只武瑞。先。よ。延。り。赤。牌。主。を。か。野。旗。と。引。あ。を。と。方。武。間。方。小。戦  
然。ま。小。山。赤。助。大。將。の。活。本。よ。主。を。敵。を。與。歸。よ。備。く。て。二。の。一。戦。  
相。え。く。下。よ。味。方。の。陣。は。堅。固。あ。て。被。ん。よ。す。小。處。を。か。る。が。栗  
虎。城。の。と。あ。つ。て。主。ね。や。そ。ろ。く。せ。ん。と。ア。士。平。長。近。は。ま。る。す。に  
拂。下。か。れ。む。小。作。セ。ラ。れ。る。追。氣。を。絶。く。敵。と。追。い。作。そ。の。よ。の。赤。虎。  
栗。原。が。備。本。獨。セ。ラ。れ。る。追。氣。を。絶。く。敵。と。追。い。作。そ。の。よ。の。赤。虎。  
ら。れ。ら。よ。か。れ。る。追。氣。を。絶。く。敵。と。追。い。作。そ。の。よ。の。赤。虎。



かうきをひやとすとおとせと勝持のひうち月をうけた 深重光

赤深信門

道持

あてこちも勝持山の月を見えまよとゆじめくらふすと

勝持山門

千波

清ととも月わざとつまよまむすけゆしんまくをまよ

勝持山門

羽毛

黒ひとと月わざとつまよまむすけゆしんまくをまよ

勝持山門

六帖

ゆうひとと月わざとつまよまむすけゆしんまくをまよ

勝持山門

鉢題

てる月をうけたれども冬の月や春の月を勝持山門

勝持山門

鉢題

妹持の月がをやうすを向あわく春をまくとてき

勝持山門

鉢題

ゆりけや勝持のとうかく月乃友

勝持山門

鉢題

名の月や因みに五老風情

勝持山門

鉢題

眼をぞらふるまへ涼しや夏の月

勝持山門

鉢題

神を更綴持山と舊田の折りう七甲子あり萬所よ武水別神

勝持山門

鉢題

社あつ式門大今八幡村小原社領式百石又冠嶽の林蔭にあら

勝持山門

鉢題

巖石あつら神と媛石と名よ

勝持山門

鉢題

あれ西にむかく千隈河已午らう生て艮不流す月圓く限地名

勝持山門

鉢題

踊るふれらう左より八幡の社らう川と通くゆす處もこの地あつ武

勝持山門

鉢題

水別の神跡あつやあへての庵とし宮寺の子院坐て冬の窓を

勝持山門

鉢題

ゆけとされど人里遠くしてあれ深一旅乃ら爲と月のとまれを

勝持山門

鉢題

今より百年もろひあひとれ雲水房はあよ筋湯しててまきと

勝持山門

鉢題

往かせうじ地あらう月のとよすてあらすすて火燒持家

勝持山門

鉢題

入相の達あつてもほりあひととれと白波羅林のたゞひ蓼草と

勝持山門

鉢題

あへさうの頭陀と經院の事とせまくあると冠山あらうす更

勝持山門

鉢題

級門因毎の月媛石甚傍小桂樹媛石小篠石宝化寺に境易

勝持山門

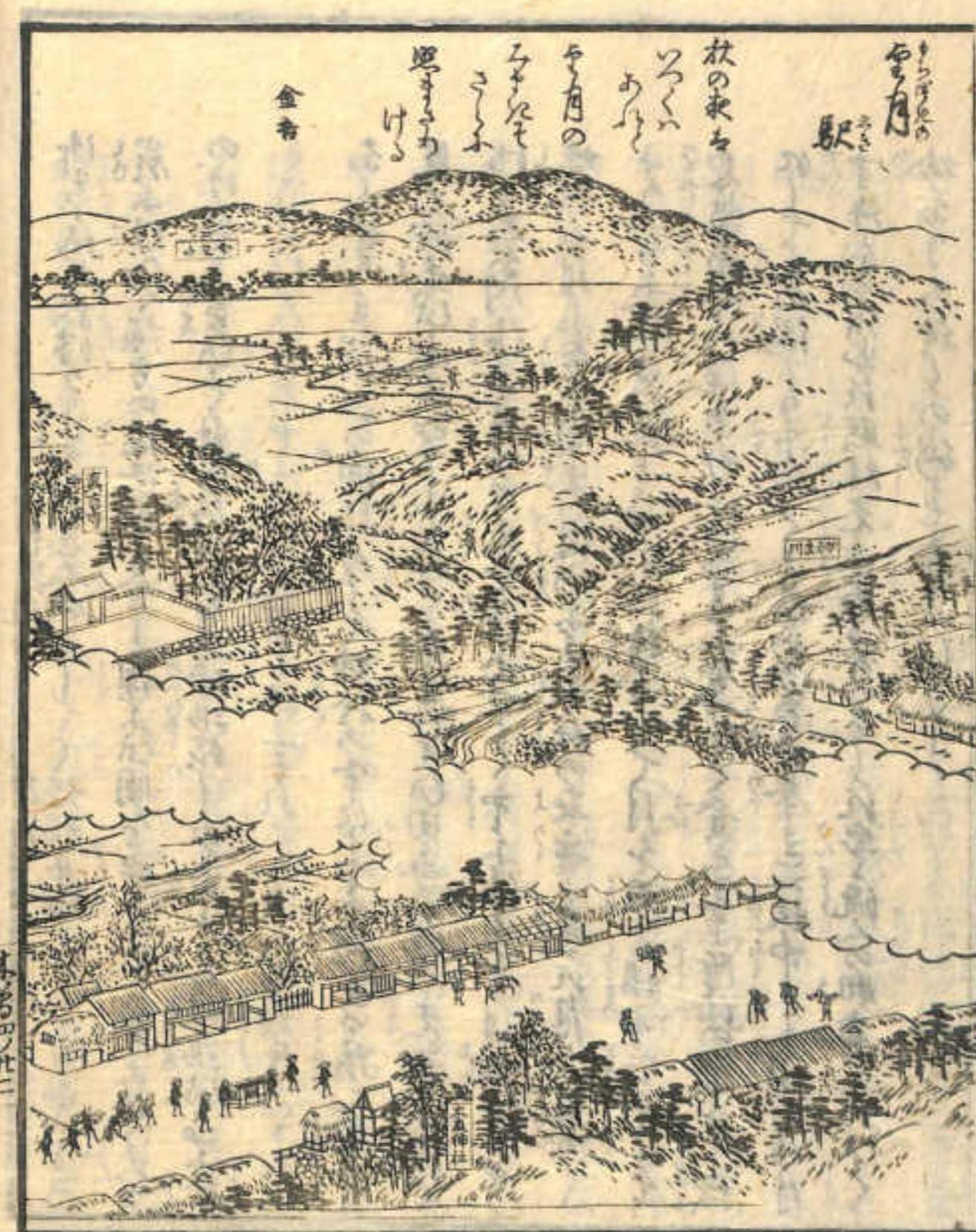
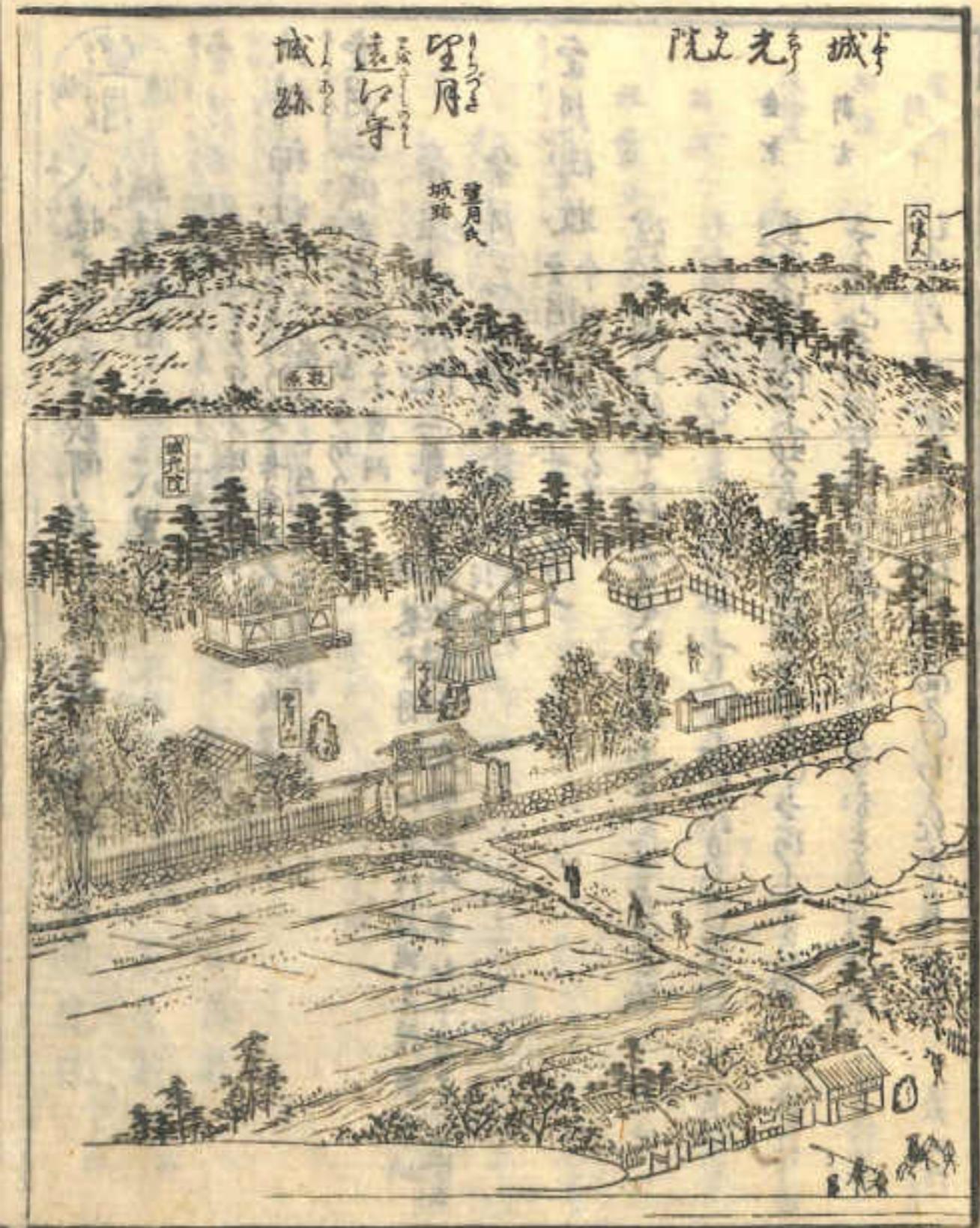
鉢題

育用山かよ一キ山あよ井薦あよて十二丈廣つゆうつう

勝持山門

あは寺小治しの月を受ける纏起あらむ一地神三代のまこと店  
本元岡姫と其御子を立てて武令にては媛姫は又姫さうすます  
纏しこそ身をせとてかくして地の下をまづめみせばよくねい事と  
色をうやそも准じるまくちかくはあよ擧の金物の怪のゆくやむ  
月と申合娘姫の声あはれうすに葉落人馬く御送すりか一自今  
拂ひぬを育み取を拂ひゆきとむすびてはひらふ拂らうが娘もう  
空すきにして毛草よかしめんやもありそれを共附くやねをう  
ゆの國よかしむかうて所あつえの月を纏めぬで拂ひぬすがほふ  
かくらぬぐとぞくかの内媛姫はやとてゆくや服を纏ふもかくみねば  
絶ゆくもくれ葉衣すくえ聞のまねふづるは小夜ゆく姫姫も内  
あるのうへ登ア指す一ゆうのゆゑとお嬢石あらこ持よのばつゆひ  
て拂ひぬれをすふ四方と拂ひぬを拂ひぬ清くがよもとども  
姫姫族の痕より身も弱りたまく一秋の月を拂ひぬは柔軟

清き爲めははう生ト忽ち悟ちして姪姫もひ寄と承く  
崖木絞金く詭方のほほ名刀令と便よは國を守人と今まをまよ  
のほふや宣ひと月の乃よ入へ姪姫姫「乞願」石姫姫は少す  
さむられかひなまを御体をおへて姫捨山とひ  
あらせう是けよの縁起みて姫捨の事にちて地主の族く事害  
見てば支び山と申すをねく南もひひ田毎の月乃光井りし夜  
はもが川清くみて天を薄よどくする漏満て月明く  
姫姫と月小夜と周生の道側ゆく中野の衣客と會て月色艶く  
う寄ふ渭より往く雪狐精ゆて月を重く雲玉手へとそ  
忽殺而條の纏を山てあまふ駕へて登る幸陸庵の下へ纏  
にそえの纏もう下りてまつて良母舉まへ候やう明白の月  
す絆あら成した照輝光あくうとてくら多流人の臘膚ふへく  
冷かうあれくの納をあうそり



望月

八幡まで三十五町あれより信濃國へ十五里

越後高岡へ到着八里

金月山趾止宿のあれより上り行け

大伴神社今川氏政より延喜式佐久郡二鹿の内へ

金月山城寺院同取手向

奉尊門孫陀三尊佛

岡基金月遠江守は名滅院廢東山  
靈廟庵主文明二年辛卯十月十七日逝去

金月石門内有

金月石門内有

金月御牧今物乃至とよ

捨遺達坂の闇れ信濃より持てりや幸らんを原志駒

紀重之

波捨わ波れ松のむすびに程のゆづらて又ありほひの

良運注所

金景東風吹きあふ野す月の駒木やひのとよふうれ室

源仲正

新古さかとふ代の古道沿ひそ又駒つりふもじ月乃駒

定家

新干もく見とねく駒を面けりたを月乃駒

元山院

價格年が暮る雲の上葉とし林の霜をみりき年月の約

信濃國院

捨遺年月の約より遅く出陣するもしくせずとあくのよ

高井郡

後拾達きら月の駒ひくとをまよひの本れ下すもとてきを有

東慶院

貢馬を獻覽一絆下を貢親七年十二月小制む信濃國牧馬え八

千製

月せ六日あ被貢く今十晩も定むくあねう牧下を身の名有

う又年月の神乃邊ひり下へ草を月あくよ七日の内席毛の

馬が是れ体跡おり奉立てを一枚紙ゆもとを

延喜馬寮式牧信濃國

山鹿牧

蕨方郡

塙原牧

同

岡屋牧

同

宮處牧

同

殖原牧

筑前郡

大野牧

伊奈郡

平井互牧

筑前郡

笠原牧

伊奈郡

高位牧

高井郡

新治牧

佐久郡

太室牧

高井郡

猪鹿牧

佐久郡

萩倉牧佐久郡

長倉牧日

望月牧日

角摩川

み保井守が流すより下流を越後へ流るは同小目浦也  
川の側あり月の盈故ともうけり一里下りて是流廣川也

瓜生カバノヒ

上引山の邊あり

八幡ハチマツ

信濃

八幡宮の登り馬あり

六十六條塚計源村

日平六十六ヶ

筑摩川アシマガワ

大河なり源れニツあ移分ゆく千隈川或も千曲川も

水源も佐久郡金寄山の陰小井井トやハシモト鷹と淳山也  
而イニツは岸すり出る様川ありそらは上至て今よ佐久小保の郡  
をほりもこの河中清に郡の境を流るすと犀川古約々嶺み出く  
筑摩寄墨更級水門の東が經く筑摩川本落合放くちの海の

とく越後の新隊此てもかの川ともとあら

信濃奈流知具麻能河伯能左射禮恩母伎彌之

布美多婆多麻等比若波卒

風雅

朝霞

ちく海川事り水のみよおも浦てくねまろすも

般僧院

雪玉

君代ちらすまの川乃まれぬもあひと墨と萬はすを

道遙院

扶桑記

仁和三年七月三十日信濃國太山頽崩山河溢流

六郡城墟拂地漂流云六郡ふワズ川

金峯山の山底ふ山丈あらんを呼んで研摩乎手手伊二声三声

ほまそすよとたち本想あひてと遂によとえ人々の乳娘りあも

あつこ木石の虎うひをひして人を因送ひ又山姥の履とて長三尺  
片葉吹曲く本ほとあを拂ひきのりうを聞くと社神の老翁祖

おのひをとれ聲のやまとすう老丈かみとよ

川中島

山本助記

上杉入道源信、川中島は今朝小見川岐守が變せんと武田の軍兵を

集めようかけ付くる事に勝負させんをあせりしゆも後醍醐天皇、  
備前船を十日すみでたすよし和が兵士方の之備とありて  
舟橋が備へ乱入へる源信今ひら紙を身合とき候て二小使の  
旗手、也入舟を一時小支を一時後陣の甘櫛直江等小船を  
軍の堅固を一や瀬一みづの旗準備一木船の兵を率へて  
陸をうけ抜ける事北通く信玄の本丸は傷死因り安堵を武  
田方の軍事備とあされと御先ほ候事と甚次穴山ヶ備を  
信玄の旗手を只三備をうち揚とを廢してあまら遠征を引か  
され還兵を率へ育てぬ亡ひ死へと勇まれば五百騎して安  
堵する旗手の本備手を左近を月ニ元長海、鈴木、路野、太助助  
立而て防とども上杉勢勇壯りて主勢を自を幸とせん

擇立るも、今自長坂跡の二将甚勇れどがて安堵され  
敵れず、徑小瀬信玄は三日守の大考めに只一移信玄未  
來ル備本部から信玄發したまさら迎撃等に命じて備本部  
一無の馬力と振られ多處武田の兵士あらずに行進の手直て倒れ  
徑小遣玄も今ハ助考ふけと六連不遜をうなぎと前されども又次  
去て六連敗軍と城越半は武功もれの危うきことを悟りてかゝる  
程に本丸中かと助りてかくと空手で内側の姿の信玄にて  
まをも育る傳信あらば連々と程驟せとれどもすが良將もれ  
其位相を考へらて見すより駒と駄あき力ぬりよし馬より  
切先りつ下殊石と掛けと初付きと信玄本丸もさへり小を  
刀と抜く後もあひて駄將連度がきりと柄と長くす走ひて  
少共達も信玄を轟き走り且ある公私の方者等と無事

信小打の主人をとてふく瀬せを下の瀬せの瀬せを下の瀬せの

智深の瀬せを下さへれど遙とおき幸こうすと正まさのを小やかんより

伝たんき河かの其首しゆが初はじまつてもさうなまく漫まん伝たんすとび發はせんよ

ツトのまう実じみの信しんきあるやせ様ように門もん出での家いえまつてもあらんばら

たゞ其中そのなか事ことは伝たんきある人ひと幸こう定さだくと思おもひればある三さんを付つん

と大おほやがく難むずづつと半はん助すけ入いり道みちへ生なまく小こかうかう歌うたの生なまと

伏ふ崩くずく入いり將まつ漫まん傳たん小こ道みちと尋たず求め一ひとがよみ方かた九く軍ぐんを威おどくかう

一ひと役わざ小こ方かたの築つき本ほんをとせ野のと西にしと通とおり處ところに敵てき將まつ漫まん傳たん旅りょ者しゃ

かくの上うへ本ほん備びを崩くずき伝たんきみ何なんうかうう若わかるもの有ある

あちと本ほん道みち鬼きと大おほ牛うしとまきの馬ば不ふ被はをうち雷電らいでんよよと逃とう

卑ひく牠ほか毛けや空そら陰かげひづく垂たれ二ふた垂たれと漫まん傳たん因いんくく実じみくくる

其その餘よ先さきとどめまくととその漫まん傳たん支さひて何なんかうを我わ我わいな

筑摩川

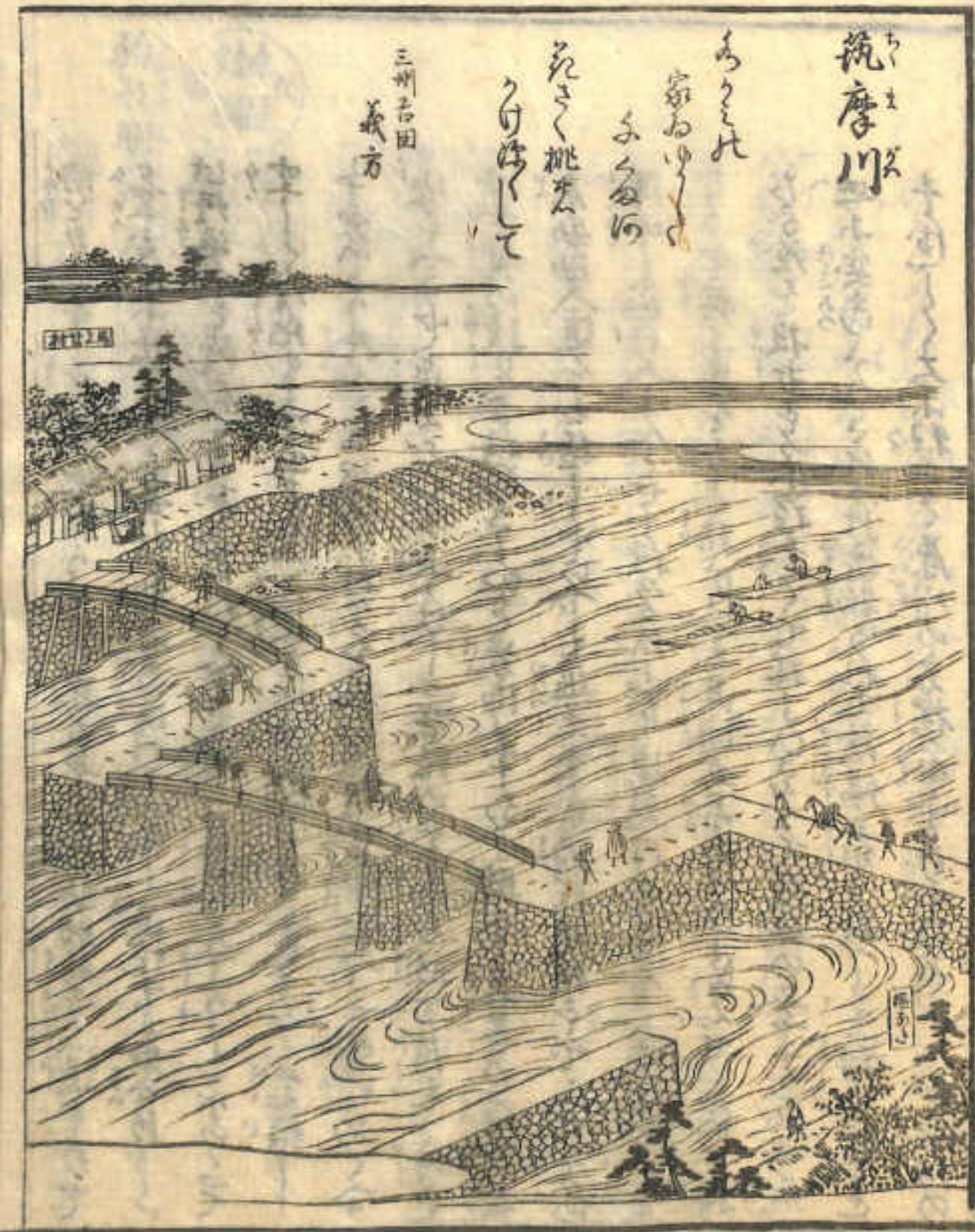
あくみ

家いえゆう

ふくら

えさく桃もも

くりはにして



娘と女郎半身赤裸でそり下りて舟を我車をよみぬ助賀車へ道すりわせ  
名前ふるふる夜は如き舞の曲者お邊河へ走り遙信去り坐合取くら  
ば侵退人を残金うそぞされしがゆ縁く味方を守り一うぶらも  
空しく付化も事無なり一旦退化味方の兵と走りあふと見惜  
手本派すら捨て馬廻されると助助入道ま中に立てる雄將そく今  
遡れど立てて走りとくか退けしう邊信のま馬を放生月毛と号を  
はせ隻の駒走りゆればひきと身方の車も駕今も名譽の邊考義  
左助助入道をと捨てしとも追尾車派せんに邊信をと小味方の  
陣中少かけ入とせし結果死んで道崩けるふとく思へばす念  
なりせし頬下馬をかく私しと其間立ちをうつとほんせく怪小持  
たる槍を投げもうる程まきて死しひさうて邊信のまづる馬の尻  
へ不寛齒うちまじめに逃物うねを陰傷ありぬても猶まほあき  
辛あざく大木根と原川の方援助少しき先に其早に車廻の

岩村田モ一里半筋内ニ前許お角にて巷と力久條事  
教主入少不曉明神あり是れ入少不曉明神あり  
駒形明神社入少不曉明神あり  
國云むく八牧馬場井中より城間の森を石井寺より之ふ

右の里よりあはは民の集とす者を宿の平山に泊のれ。右を左へ  
見一寺ひくを下まつて其の太石畠といふ地。右駒のれはなる。  
右地より出づるを左行を感して年々月日月の牛は七月とぞ  
ある其のれ。

右の里よりあはは民の集とす者を宿の平山に泊のれ。右を左へ

高さ三尺四寸計

佐久郡相馬村

新田



波の方、長く基不破なり石を真石駒も同車く  
駒の車の内を武三分程也。

今も社を表く駒形明神と崇め先多くとく  
は駒公也く下坂原上坂原も街道もく少くあり種く囲む  
と越く平坂原村よしる

相生松

岩村田

平坂村

小田井

中で一里七町駅内の町五六町あり相附

巷然あん其の駅在て若光寺へ別道あり又小諸在  
二里たり又甲州道傳あり駒内森後波波  
の領地も高人多し

佐古祠

歌の切の出やかうとく

小田井まで京せく家がある

かくへう原

左の駅の馬水車の馬場

芝草場

波波あり左の駅の杜育

小田井

信

佐久

村

田

岩村田

信

&lt;p

邊  
信  
分

當拂まで一里、河寄上りて出をあり

し同石をもてて道ワカレ

東山道

追分

進に、也とあらへ、さくば、わ屋道と、若走ち十八里、越後

の、高岡へ三十里、進む

の、谷川と、所まで、追分、をせん、黒道、後、の、高岡へ三十里、進む

お、小五郎、松二里半、り、と、小諸、ちよ、前、あ、牧、聖、門、脇、山、坂、分、

小諸、田舎、と、經く、上岡、(れ)、こ、井、と、小云、道、う、り、追、(れ)、つ、上岡、(ハ)、生、半

あ、う、筑摩、川、の、ほ、り、と、ね、半、修、賀、守、參、の、高、嶺、(れ)、城、ほ、う、法、の、高、嶺、

あ、ひ、國、中、継、り、魚、場、(れ)、と、も、ま、(れ)、す、ま、國、(れ)、所、も、上、岡、乃

奥、(れ)、あ、う、ス、上、岡、(れ)、八、里、す、奥、(れ)、代、と、之、所、あ、う、真、岡、右、京、幸、美、度、未

舟、(れ)、其、先、本、丹、波、鷲、(れ)、と、ひ、あ、う、筑摩、川、を、つ、る、(れ)、魚、川、牛、傳、う、り

筑摩、川、と、犀、川、と、中、外、有、る、(川、中、鷲、(れ)、と、甚、多、小、接、岡、川、あ、れ、

む、り、本、る、義、仲、と、平、家、の、方、人、越、後、城、を、布、と、合、城、あ、う、一、切、し

東鑑云、壽永元年十月九日、越後住人城四郎永用、相繼兄資元、當國跡欲奉射源家仍、今日木曾冠者義仲引率北陸道軍士等於信濃國筑摩河邊遂合戰及晚永用敗走云

浅間嶽

小田井、追分の宿、梗井、沢、等

吉今

千載

捨達

新古

日

剣丸

續千

ても、わの、浅間社、より、佛事、ア、人の、ま、供、を、戸、て、奉、あ、れ、ま、う、き、  
志、自然なる、も、本、方、な、事、と、り、ゆ、き、の、事、の、屬、が、い、ま、く、た、  
病、ふ、た、あ、る、れ、聖、子、は、を、く、て、河、の、被、を、く、お、ま、し、と、  
片、か、て、秋、意、す、ひ、小、難、被、浅、間、れ、け、の、す、な、り、も、  
徳、清、ぶ、る、を、く、れ、嶽、や、つ、煙、そ、ら、の、み、や、く、ら、う、る、  
え、す、く、済、る、の、方、寺、は、モ、ト、方、山、  
あ、が、く、済、る、は、ア、の、煙、を、や、く、く、け、ま、く、と、の、

御方館  
紀、キ、之  
業、平、野、居  
難、経

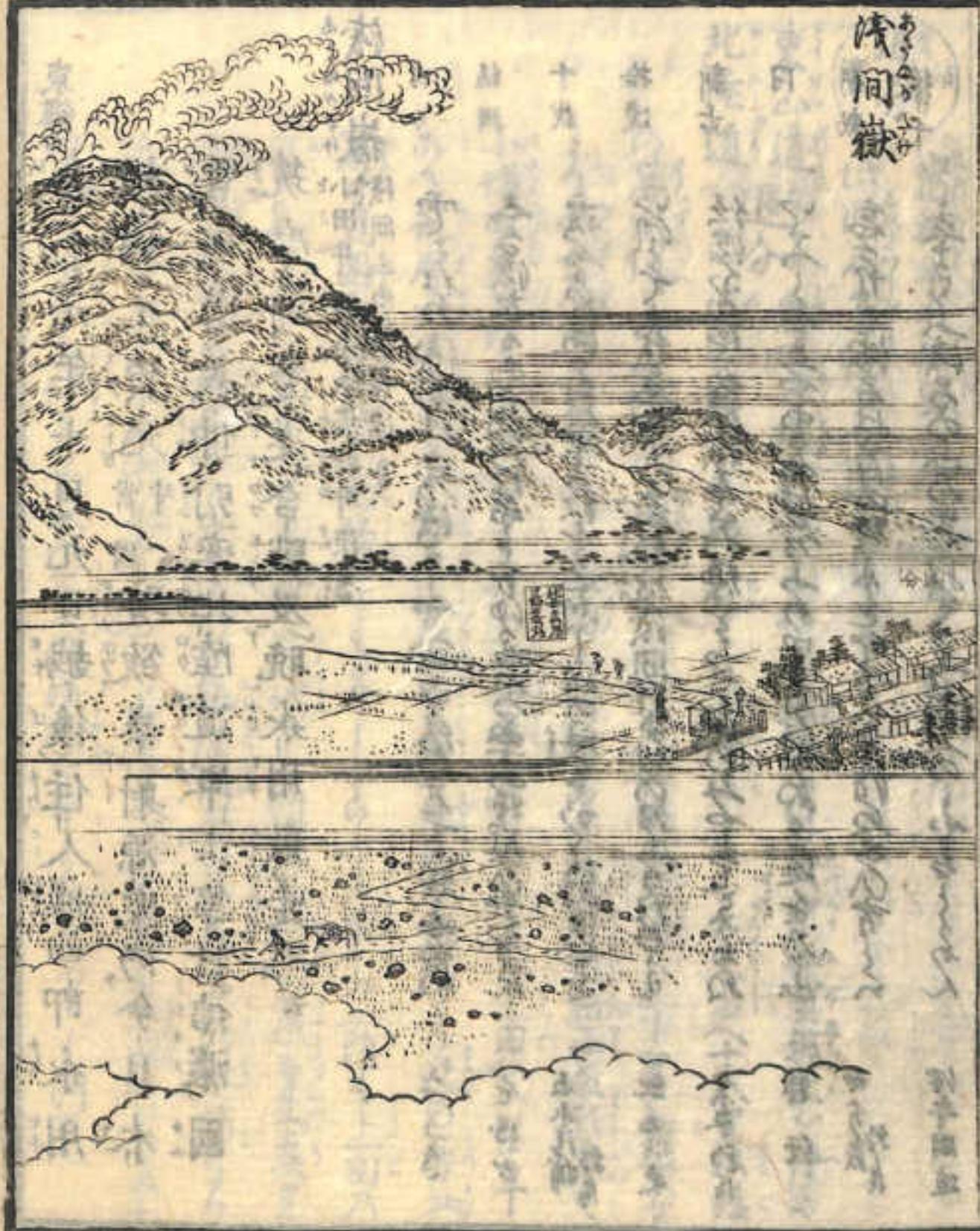
は、寺、圓、道

濟間嶽

北嶺

參

十九



火  
山  
標  
志  
本  
蓋  
部

火之山

燒山也

火之山也



勦撫

卷之三

全集

春生は新聞の小説をよく讀む事多し。此を  
幾度か試て聽んでも未だ未だの如きは少く、去  
つてから少くとも試しておられたるのをうなづく。

陳同山記

資志真錄

さうの是を此處の清柱たててよそわ承をみまくから御  
ゆるあ裏又是一つある所宮を高天の神ち不意もアヒ  
アヒたきり向まは且やう方山よその御も烟多す傷いみ有  
きもの浪もすく字頭アヒて甚ひう手をまくる門耕  
はすと前あくじやと扇と賀土の玉あら萬するとうに煙  
えもくほのまなづく写るハ十畠が浦と伊豆とよ御  
の巣半とひそくかく鞠像ナリ日本を守りわう尼良  
龜金於士志志振きくもとせせりあれあくと人ちよ  
あくつてのあがん天はこのね乃神ほまた木はまふらひ  
拂乃神おのれのよれりむすうラスアラミム畫一せん  
や中うちあ

清圓が樹は極く高一丈八尺も出でて葉乃だちにわきまく  
見く紹く代宗にあて煙草のタバコのつまみはよるをく又モハニ

移り半時じまへ立て黒參と玉筋山の下より下至  
本生院一日は中三度一時半滑あつて筋も付て有七里の間  
難しと當動を四苦院の事ひと申れ候す事あり筋山も難し  
し焼石道の事ありにまくらう事は右より行けと也と聞也あして  
すと早く新地の坊なるゆく説とに集まく傍そろ人種半ねうり小種  
あはくあらゆのをりてとせよ人種の折りてへ居の在る事有  
く此山ちにテの方へ近く美濃尾張の方へ遠く一役勢物語尼業平の  
道筋の沿寺序勢尾張の事ありも庵をなめが見き哥どすくらる種主  
事わくやも後勢尾張の方よりと道のりと遠くと廣間を歛きよめれ寺  
嶽寺を移しゆる業平は武藏上當の所よりと廣間を歛きよめれ寺  
が後勢物語を編み人本よあへと名退おれ取よし歎まで二里  
あり又歎よりを歎まで二里半がう崖母巖窟あると虚空藏の石  
佛と安ら地頂の人坑より不縫立のほり車へ流英の氣り流英備

時度地火突發ト大石細くもテ又砂石砂礫テ雜然而廣く其冲く  
數百里小圓沙也今夏月甚もチ熱氣也と立夏の後百日ケ日多過  
て雲の晨のや一又中秋より夜もしくあらひもおふくまで毛竹林  
極に又此山小落葉松生れ又土ねのや一又生葉生れ生れ枝泥く又雜  
の追がもう種矣次ナで土地別トて高た所ニ寒氣甚はく一又穀  
不毛の地とソシはべト

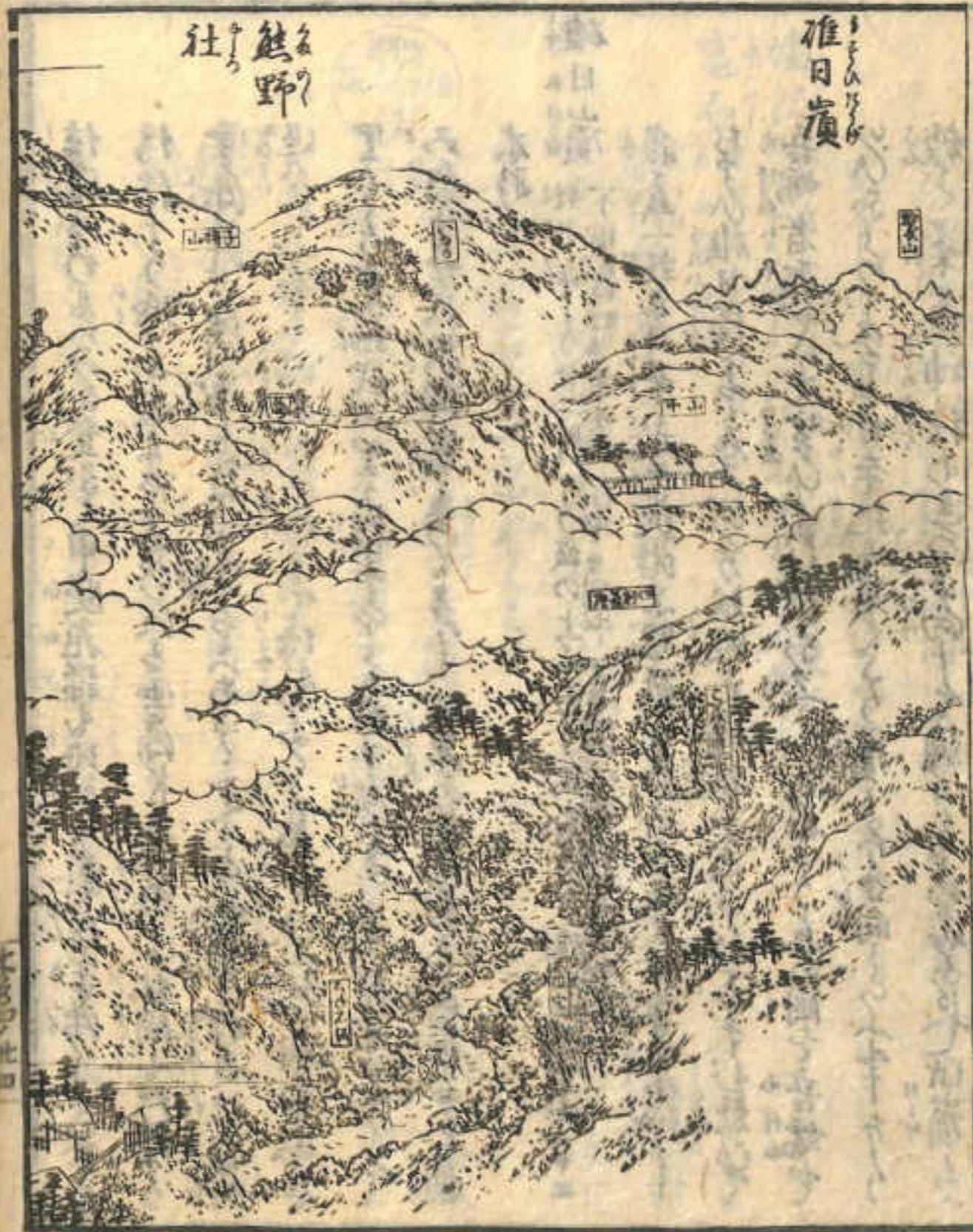
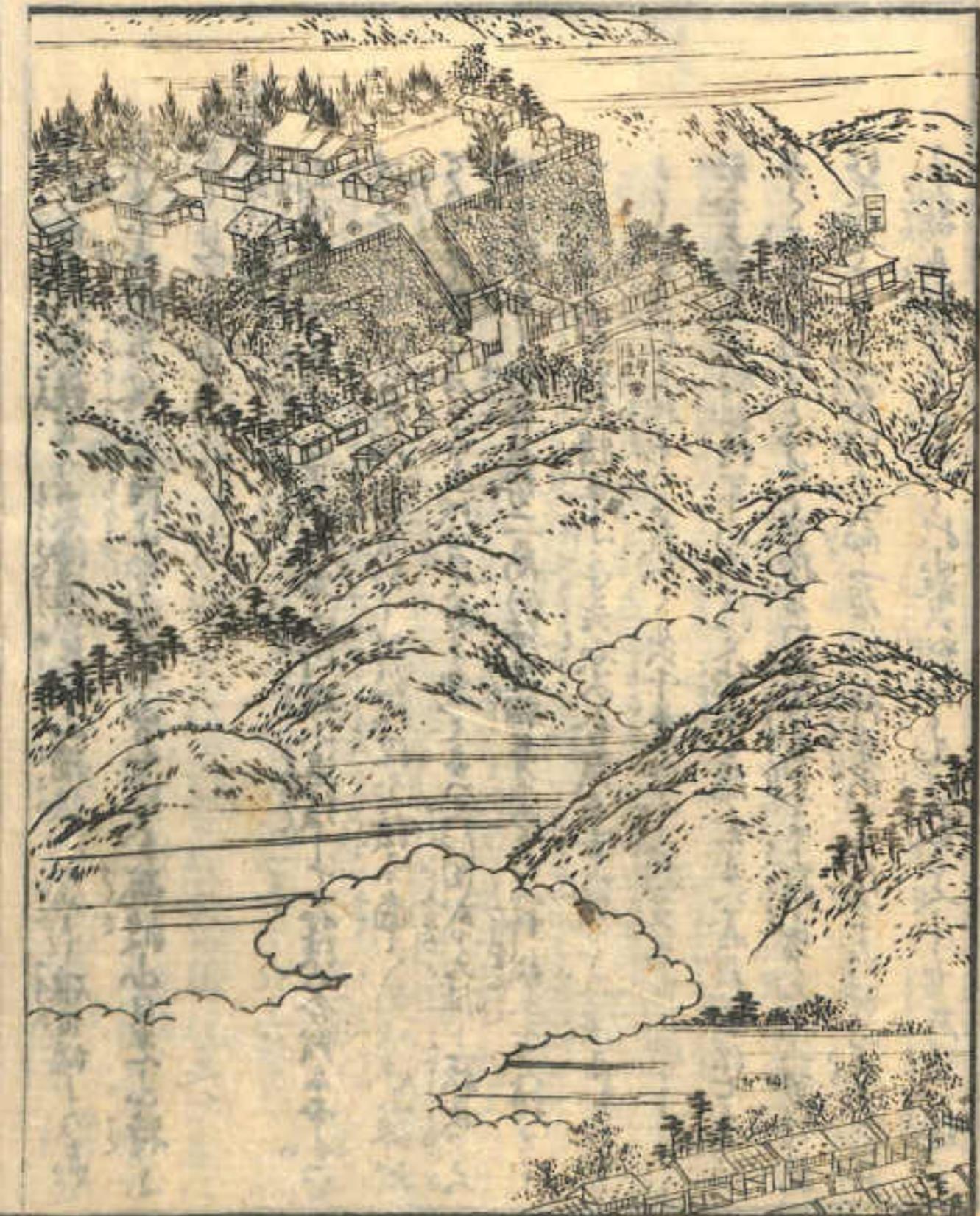
詔方社みわや 宿しゆく  
夢料神社ゆめりょうじんじゃ 在宿村小あつ三代事小澤こざわ 天元慶二年七月據うそ立たて經下じゆげ  
御ご祭まつり六月十八日はちじつの生土いのちのひ神じん  
追分おとせきの延のぶ持もく縣あがた 小國おぐにの備度びと美うつくくうつく神じん社しゃ還かへ / 異ことひのタケハ旅りょ  
舍すみを多く又寄よ悉ごくごれども經おみ次つづてみふ法圓ほうえん山さんの甚麻せんまがうは歌うたと  
多くかく宿すみすよへと宿すみと狐きつねて尚なお掛かの駄だあつて  
狂安次きょうあんじまで一里いちりを齋さいは祇中ぎちゆう三宿さんしゆをうち左右あひらうお隣おとなりして菴いのう爲ため  
ナハ修さなと教主きょうしゆ一農家うのうけ一宿すみの入いテ木法圓巒ぼくほうえんりんの道みちあり

追分皆掛  
井汲の三駄を傍回のめりとて其葉より巻まく  
一里中とつて皆掛け井汲までみ草泥う  
左の方木屋陽の池あり樹木より人そば  
山池より源を引く小川あり水雖  
竈石方より出ゆ

當掛ひく紙立く奉行村お一坂あり左右聖系有り塙沼村  
孤高と新田ひくもあれ村たよ松まとあうけをと平安が原た  
ノ道の左右み詔原めらうり  
坂かすで武里八町新中ニ町をもろ左右お射して巷ともい  
甚處ち山間小教在次は所を遠通里とひき候勢地獨り  
よりて坂人の名付くもの御さん  
桜井源もと雅日賓すで廿二町寄りて東の坂手まで計生ノ所  
ひくと坂下宿まう事る一法法を日幸の内もくを地経内  
ちん所と其ゆき海をして山よすある國に三方の壁もく

施  
濃  
信  
派

信濃小河又六みる登ふて甲斐危穂も地於くるく法事拂ーとツモ  
信濃より拂ー故小名玉の山も雪拂して寒ー北國を信濃より  
雪原見どゆの便と云はばやしもあてつゝとす松中怪井次翁  
遙かに二宿も宿間林の腰もて堪れずと高ーは二宿の間車か半  
里もう東あ武三里が程ナラシ度量こ寄れ車甚くそ  
み轍生せば只稗蒿麦のまき一又葉の樹もあり民家少モ植



西より海東に入り、北より本連道の里、船山、箱根山のやへ確日はよりを  
見まつま夜下、従常陸上をゆづすとゆが、硫波山日本山特小  
高見く

太平記事合戦云

新田義宗守義宗、足利將軍の軍運小退緩して、ほの合戦奉手を  
達せば、うちか試験圓をもあむ。試験は信濃を後、ト南、西、北、東、陣、城  
さうて、を勢ひ、今まとが定ておもて、もと太田、田原、武、大浦、上野、民、ア、太  
浦、先陣と。勢合甚勢二萬騎弱を、朝多二の之上野、親王を大將、  
て、西次、浦、小市、知れ、將軍、小市、多良の合戦、小市敗、而、夜、済、小市、夜、象  
よ、一、寺、内、を、廻、事、り、名、人、六千葉、分、小市、利、友、也、大、將、と、  
勢合甚勢八万騎、將軍の、清、瀬、と、強、主、之、薄、食、也、義、興、義、治、七、處、強  
母、く、義、劍、と、け、と、す、武、秀、少、の、新、田、義、宗、す、上、秋、慶、ア、大、浦、一、方、強、勝  
先、を、わ、く、と、ま、も、く、く、命、不、死、と、洋、定、あ、う、な、ば、す、イ、勝、の、方、ま、る、あ  
主、大、浦、小、市、打、勝、う、が、魚、ア、ヒ、小、勢、ハ、強、だ、と、も、近、敵、と、一、セ、瓦、鐵、一、蓬、不

本草四ノ北立

定、く、將、軍、内、二、月、廿、六、日、不、候、城、立、く、む、さ、れ、府、小、名、路、ば、甲、斐、大  
源、氏、武、國、陸、與、る。内、刑、ア、大、浦、不、見、經、理、危、武、田、上、聖、也、は、甲、斐、前  
司、公、始、く、と、て、勢、合、式、手、後、移、り、く、強、矣、る。内、廿、六、日、將、軍、第、第、件、ヘ、押  
よ、せ、く、敵、の、陣、と、見、く、ハ、小、松、生、長、く、キ、ホ、小、河、流、く、る、の、菊、伏、陣、小  
取、て、峯、山、少、少、の、陣、旗、と、打、立、め、り、と、み、白、旗、中、軍、搜、柵、の、軍、旗、の、素  
の、綾、う、た、る、旗、ど、も、其、殺、渴、く、と、廻、内、一、幕、小、幕、手、奈、内、者、う、兵  
と、て、甲、斐、源、氏、三、手、後、移、先、て、押、ト、き、く、朝、國、武、義、守、と、報、毫、も  
荒、き、の、城、役、勞、因、ニ、手、後、移、も、く、ね、難、く、外、ひ、ア、モ、守、附、だ、う、叛、不  
逸、見、入、道、沿、下、宗、院、の、甲、斐、源、氏、石、廢、移、付、と、く、引、立、テ、我、く、二、幕、内  
千、葉、分、字、於、宮、や、山、佑、竹、勢、お、あ、り、ま、う、そ、七、千、ト、た、上、秋、慶、ア、大、浦  
ヶ、陣、ヘ、キ、よ、せ、く、入、え、れ、く、現、ア、信、濃、勢、式、百、名、騎、付、三、け、左、庄  
寄、も、三、百、名、騎、付、れ、く、相、小、左、友、報、と、引、け、モ、面、陣、全、身、そ  
通、五、一、川、其、日、の、平、刻、ま、う、面、耳、の、終、す、で、わ、一、モ、体、モ、僅、く、終、解

たゞひそして分り文小勢よりとて敵ふ物すと鳥雲の陣ふらわ

鳥雲の陣とよし先後本山をあて左右よ水が邊よく敵と平野小見

か爲て我勢の徑を敵に見せばして虎責狼車のうちく射め近

敵之は陣幸ふ鳥雲を面よりゆく残ノ利實もうとま充ち

善き者えひ敵を度も少しきもと之勢もうちすれど間百波城へ

千波を越すとても敵固ふあゆる程の大勢うれば計画上松はゆ

おきみて箇管作へぞとよろづ下裏妻一きと

は武田大膳主文晴信と瘧病もて引籠つる程にて

松重駿河守が大將と仰一栗糸左衛門尉誼を日向大和守小山國吉

多房尉山宮山丹後守昌友を達見勝居小曾南郡小信州守立芦田

平助も相本市多房尉を指副らる其勢を合せ多磨十日冒小甲

府をさとく様よ拂ぐ押宿小内六日の己卯よ小室通の追み城邑

脇井川を越す箇管作へぞとよろづ前方北先陣を上回又次郎

日本武志ハ雅日廣  
より辰巳の方伏とす  
橋畠をさむく吾鳴く  
と寄ふるるる今之持る  
金名の下くは世をも  
持け



見因五郎左衛門、松井國吉なり。既小二万三千餘人の軍勢先まへる爲め、  
萬代津と源方(お鐵後陣を限り備とす)の彼方本押付とて大將  
板垣信長今日の先鋒を信頼はまむべくして萬代津よ強付向ふと候  
見上れば藝(術)くニシテ佛狹山方(アラ御(う)ら後陣の勢とけり)にて合戦  
を候。人と勝利を争ひ、もとより勢の大勢(ひだり)と頗る當てにあらず打て攻  
めをせし。一ほん本波(もと)も一木牌(もと)とこうべト繋がる。下至宮城(くわいじやう)とよもてに  
故の先陣上田又津守(うつしゆ)と之藤(のとう)森田母(め)はる(め)守(め)と云ふ。宴てける  
三科肥前守(ひき)廣(ひろ)敏(たか)の左衛門尉(さえどん)一義(い)と聲(こゑ)入(い)る。持(も)りて  
持(も)りて突(ぬ)けて進(すす)めてゆく。却(かく)すう是(ぜ)と見(み)て上田又津守(うつしゆ)と  
すみ傳(つた)ぎやとして母(め)はる(め)守(め)と云ふ。丹後守(たんご)村(むら)士(じ)と云ふ。  
就(さう)を抱(いだ)く猪(いのし)子(こ)を廣(ひろ)敏(たか)の左衛門尉(さえどん)生(うぶ)年(ねん)  
十七奉(じゅうしお)と名(な)ふ。丹後守(たんご)と男(おとこ)を自(じ)ら  
押(お)す。引(ひ)きて兩馬(りま)向(むか)ひ立(たつ)て走(はし)る。猪(いのし)子(こ)負(お)そ  
難(むず)かく丹後守(たんご)を追(お)よ。首(くび)撲(うつ)切(きり)く起(おき)上(あが)め。葛(くず)田(た)の從(とも)兵(ひょう)主(ぬし)と討(うなが)せ脅(おど)す。

せんせ追取卷度瀬を即ちあ種孤見て坐く小鹿市主歎の前進を  
中に至るく又下木五人安休うち死傷兵士く甚非く其傷  
數走は上列勢の後陣と候と縁もせある事と板垣事よ切歎ふを  
大本敵軍陣易して旗四度躊躇丸もア久丹後も早けれむを  
之れに共あま者とも返し令せせ場所にて下すうを及と見を是  
口が軍勢消りて精ひ事多缺然陽をキヒと發揮する所  
上列勢の二陣降晏隼人等をひき在り者たと退てり武田勢  
の曲渦底存獲一蓋本塗と全く共も施設を付かぬも進んで攻撃  
ニ蓋本塗と曲渦本塗との間共多燈の被火とほりと闇を駆け  
馳入へは木戸の方より越す五廟の軍兵立星より一隊小廻立  
られく右往左往不遜走る陣固隼人踏止まで守護ひと心掛く所  
風情坐て敗士を恥じめ居る所よ三科肥前生年十九家うち不相  
ゆる所へく先手の所役者とこそ云ふれ斯級軍ふ及く上へば不

切所かて公の佐よ小遣一もあふを見幸ふさればねうれむ

遂小勝負へおうじぬ青よりとも歟のたすくは江戸と之陣本陣花く

ひそく令よお悔すや跡墨も互に落着也含めよしゆく城よ見る妙よ

三科力足と端く決せよ碑あと空居よ隼人の内甲と窓よく馬

連1モ落すうる肥前も左右よ青公こう筆がく二陰三陰ふの轍

拳動て則首公挫手く松井因三種を乞くちゆよ越て信くよ興の振

森よ毛非小遣へて付たをせよと究竟の者と馬あよ連ひ備よ馬

乃小吉く切所を試せよ事ニ本役はんとほあ伏栗木日向相本芦田浅

始よて胴勢と引と突うす中も上船せぬも向金泽を席き首と

さり巴と毛真引退く上校勢敵くに付負よ体を試く敗まつて此階

こはな宿小缺の面公の年一一千八百十九級武署すくよし公とて

大半勝其日の年引よて大將發のち信形勝岡の法式を執りせ

其身本丸本腰をうけて軍政と奉乃せり分母へまよぐま主將のめじて



天晴美く一色もとく水落行 カタキハ苗代金武走を

鰐野権現社 （元日祭の町本あり）幸社三本木社多（一）も居 鰐野神樂  
石坂（鰐野の山）宮すりおーまの方本二王堂あり

信濃上野國塙

塙抗あつ

石坂十八町 （鰐野塙の本より）

万葉

かみ里でうすひの坂といたて嫁をもくちよめうそ （讀人本だ  
と中ふく碑あり）

鹿トノハ

碑あり

煙井源をすりくさわ坂嶺小ゆゑとけ所あく想ひうち底ふぞよ

山かくうてちよこやうの河を阻うてあこ鳴てアミ越え田を

難よくもあく小野路見ゆりしくよじよまの日向郷み降らそ

新をすり道ばれぬあきこらまどむすりへふく色同くに

一盃の酒よ醉よ道小例まく泥のてく形よ半波波打人確日浦

ふつうてちよけ権現をおーし中村より刎石坂を下すそ醍の筆尾

に覗ひ酒夷本あく紙と藤絆を拂ふくこと秋よう下足坂十八町志

本有四廿九

坂上

松井田

宿車に

松井田まで二里半宿駅立町

民家相隣して巷をみて

路傍にをゆく坂本の旅館の處

横川

宿車に

横川の流を拂りあく外宿御樓ありこね久横川の

百合善足塚石小山沢の道の御本あり奥原氏の伝元ゆく太郎

日向武志をすりて夷のい傳人方志山道の日向

大國の古跡あるが武勇ある

けり竹へ日向車本を疏案見とて

このひ武勇もかげど

佐とまきか人方を毛利人をやのくいい傳人さんもくびに

公光の子百合善足の傳人也

天皇の御代吳丸

公光の子百合善足の傳人也

天皇の御代吳丸

佐とまきか人方を毛利人をやのくいい傳人さんもくびに

佐とまきか人方を毛利人をやのくいい傳人さんもくびに

射抜

宿車に

射抜穴の通り今小丸く穴見ゆる

佐とまきか人方を毛利人をやのくいい傳人さんもくびに

佐とまきか人方を毛利人をやのくいい傳人さんもくびに

佐とまきか人方を毛利人をやのくいい傳人さんもくびに

冬山

宿車に

冬山のあきらあり

安中まで一里三十町

け歌をね枝ともく

八幡えの島一宿宿本ふあり是より妙義山よ赴く

松井田

宿車に

松井田まで二里半宿駅立町

民家相隣して巷をみて

路傍にをゆく坂本の旅館の處

横川の流を拂りあく外宿御樓ありこね久横川の

百合善足塚石小山沢の道の御本あり奥原氏の伝元ゆく太郎

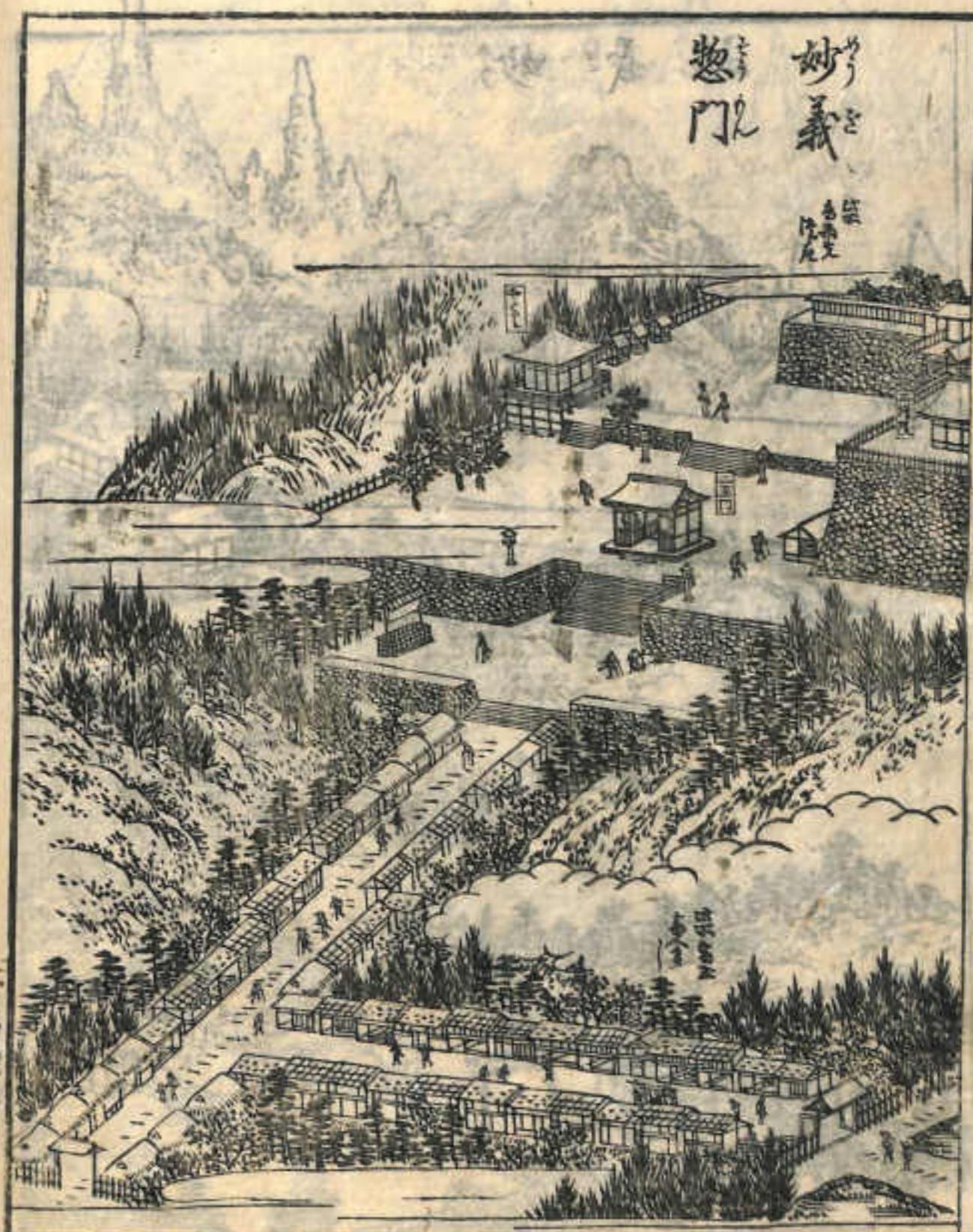
妙義山



妙義

靈

惣門



白雲山

高顯院

俗小妙義山と号す

松井田より入る又横川

奉社

妙義大權現社

天祖神と號す

金毘羅

山王

北三夜

川

奉社

妙義大權現社

天祖神と號す

太神宮

末社

八幡宮

大日

金毘羅

山王

北三夜

波古曾神

社

龜山地主神

辨財天社

神樂殿

天神宮

飯綱不動

巖窟

大荒神

本坂安井

中門

雨闇あり

巡廻席

巫女列を奉請人サ神社を

御湯金

三ツ

隨身門

左右玉置門

三天之安井

石階

百六十五段

辨財天社

饭綱宮

護摩堂

親世音

歎喜天

中門

雨闇あり

中門

雨闇あり

辨財天社

繪馬舎

太神宮

飯綱宮

親世音

歎喜天

中門

雨闇あり

中門

雨闇あり

辨財天社

巖窟

巫女列を奉請人サ神社を

御湯金

三ツ

隨身門

左右玉置門

三天之安井

石階

百六十五段

辨財天社

巖窟

巫女列を奉請人サ神社を

御湯金

三ツ

隨身門

左右玉置門

三天之安井

石階

百六十五段

辨財天社

巖窟

巫女列を奉請人サ神社を

御湯金

三ツ

隨身門

左右玉置門

三天之安井

石階

百六十五段

辨財天社

巖窟

巫女列を奉請人サ神社を

御湯金

三ツ

隨身門

左右玉置門

三天之安井

石階

百六十五段

辨財天社

巖窟

巫女列を奉請人サ神社を

御湯金

三ツ

隨身門

左右玉置門

三天之安井

石階

百六十五段

辨財天社

巖窟

巫女列を奉請人サ神社を

御湯金

三ツ

隨身門

左右玉置門

三天之安井

石階

百六十五段

辨財天社

巖窟

巫女列を奉請人サ神社を

御湯金

三ツ

隨身門

左右玉置門

三天之安井

石階

百六十五段

辨財天社

巖窟

巫女列を奉請人サ神社を

御湯金

三ツ

隨身門

左右玉置門

三天之安井

石階

百六十五段

辨財天社

巖窟

巫女列を奉請人サ神社を

御湯金

三ツ

隨身門

左右玉置門

三天之安井

石階

百六十五段

清寧延壽寺第十二の座主法性が意像山に詣する營坐相  
ゆるかに左遷ゆをうん幸に勢ひの名岳を退き此義山開創  
し終て拂は清少と青岩峭壁として山隠ふ坐人稱ふ和じてべき靈  
嶽あり遷化の後あら小妙氣権現と崇祀貴賤の尊信有れり  
特小今より百五十年あ寄特ありてそれより官舍殿閣壯麗  
再興ありて日夜清人絶る幸か一寺坊と石燈院と称して天台宗  
東叡山は屬し例象と方舟を以て中に入松せりあり何ともに尋  
立尋まつり有奥院と寺社、うち竹林あら岩角をはらひむねを  
大日尊が安ら門あの旅舎も或町井新川あらぐくふ岩は書院を  
調ひ詣するの宿アトヒ妻の江上一翁よ百姓人も泊りて宿りひ  
いえん房野一靈跡ありとて関東の人民を以てこそ教誨作らる  
にあらずと謂ふ事、傳聞あるの靈地ありてほどの大きさふまひ  
かた寄木の分野うれ神靈あり幸ひづくま名すよひすば

靈あり故本初よりを承りあうとぞもれを  
琵琶窟（平地なり）宮の窟ありは迦鄉細纏を  
原一村（神明の廟）海ありは迦鄉細纏を  
又作細工のたまく  
松井田（又）又作細工のたまく邊坂の神明あり是のうへ本社殿を東移す  
義山（又）又作義山）清毛（又）又作清毛）入アテは坂く出アス江戸より清毛アモ  
あつ村アモ入ア坂川（又）又作坂川）出阿キリ琵琶の窟（又）又作坂を越え上流の裏  
山王村（又）又作山王の原）爲河アハ辛木村アヘ親善堂云あり原一村  
一里山（又）又作一里山）むろがるく安中の駅小つてあ  
十駒町（又）又作十駒町）あり其名左右木あ  
駅を立（又）又作駅を立）唯日川ありは次中宿の出離れモ又は門を立て  
あゆ木へ安中川（又）又作安中川）とく中宿伏木へ青葉山の岸根孤礁日  
川（又）又作川）流々青葉山へ青葉山へ切立てやく岩山



板鼻上野

高寄まで一里

高寄まで一里三十町は聚民居三に町をう相對して

貫前神社 桜龕の南の高き山腹あり一の宮也  
延喜式内大神

仲夏八月十五日

奉社中央應神

若宮八幡宮 上豊岡本あり 八幡宇即 腰掛石の回路より人到來三月十五日  
鳥川 高崎川ともいフツ 橋あり

板鼻を高く八幡山へ着塲村の法圓檀觀の宮あり豊恩村を  
経て見えては高壽川より遙か向ふ瓜記ワセは月吉原野  
北条の嶺より出く樹木の間を雲も峯れ松風すみゆくの

高嶋  
倉加野すで一里十九町は所も松平右京亮侯指城の地也

高嶋

城下の町長へん三千町もろう繫昌の地へ山國都會也

みて月毎六日市場へ山國都會也

馬の輶も用其外往くの物ばゆて交易を興ひいとんこあ

あまうわりりくは此むふりつ  
佐野舟橋舊蹟佐野ひしき鳥川を越橋もくびせり  
本の記載教れ碑佛あり

佐野

舟橋舊蹟佐野ひしき子の舟橋もくびせり

向の名と高橋とも

万葉

萬葉の佐野く舟橋もくみ草はれをふ違める

相夷

多喜小さの舟橋もくみその駒乃浦をふゆと

全素

もみ駒の中河浦絶して流まうらも洞あつてより

後方

舟橋水をぬうて浮舟をうそ波す佐野舟橋

佐野舟橋

道また佐野く舟橋と云けて月歩をまする秋の旅人

秋歩佐野

夫木

煙土の里代生えをめ小舟てちく宿主もく佐野の舟橋

佐野

定家卿宮

佐野新府村より御宿年歷書くうじ  
例東丸月十五日

佐野源左衛門

恒世旧蹟石造の中河あり

佐野恒世

吉安の人に小賈矣

特小鉢本の縄曲舟車之へ

名古一寂明寺殿諸幽竹脚の本室と縁より見て其の處の

焼みて縄曲巻渠も見てころは旧約もほん根根

佐野長者登矣

佐野

長者登矣

佐野

佐野の舟橋今

士の舟橋

新岡すで一里半は歌六十町をうり向きて民家相對

巷公あん甚解故在には斯より日光山の道原橋の道ありは

をゑく船因村を鎌林の道也と岩鼻むしの川も鳥門の事は

まよ

てあ生て西川舊令よて中河村より足利の内あり赤本山禁名

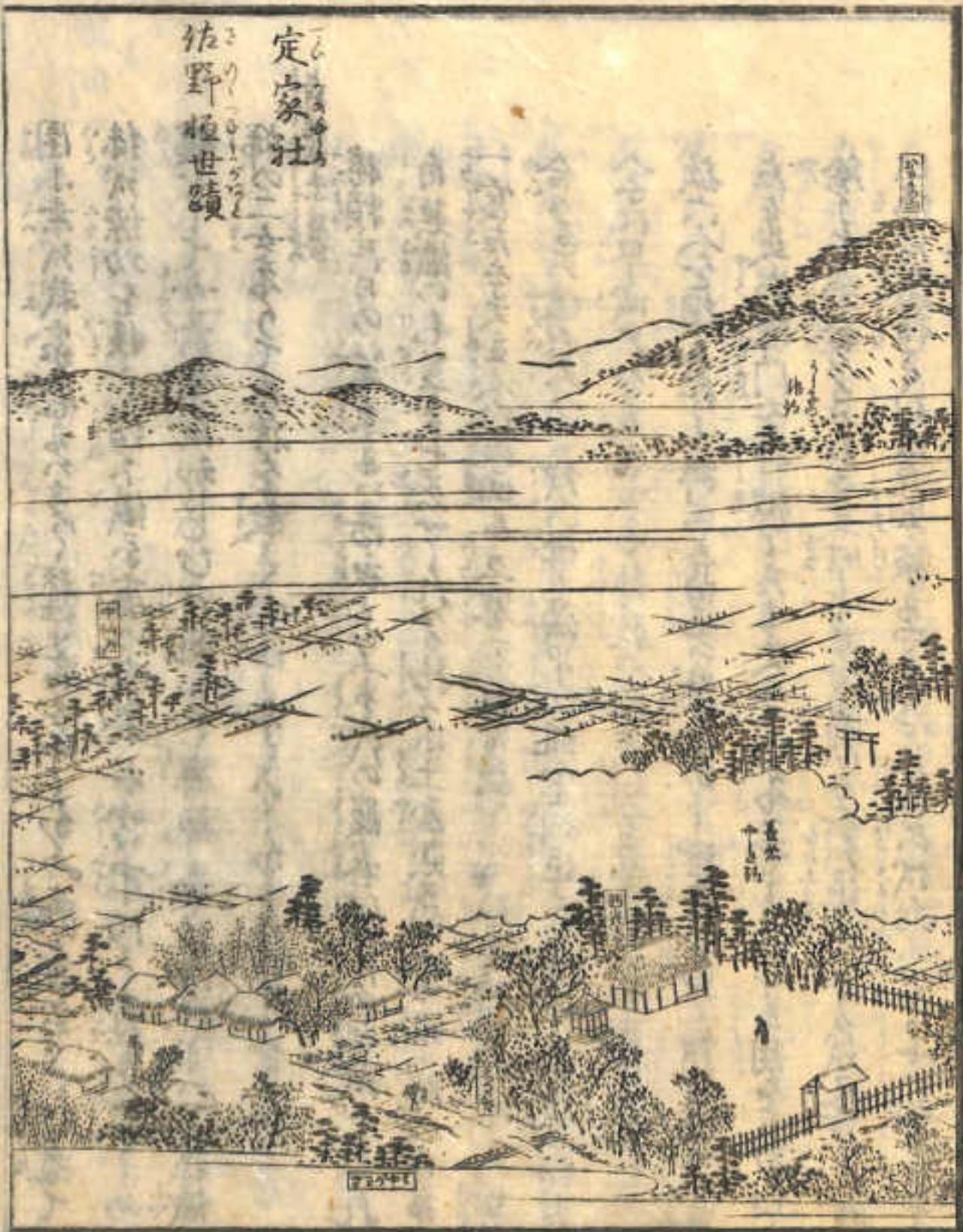
山を傍れ木見ある立石がゑく船河の歌ありては

山を傍れ木見ある立石がゑく船河の歌ありては

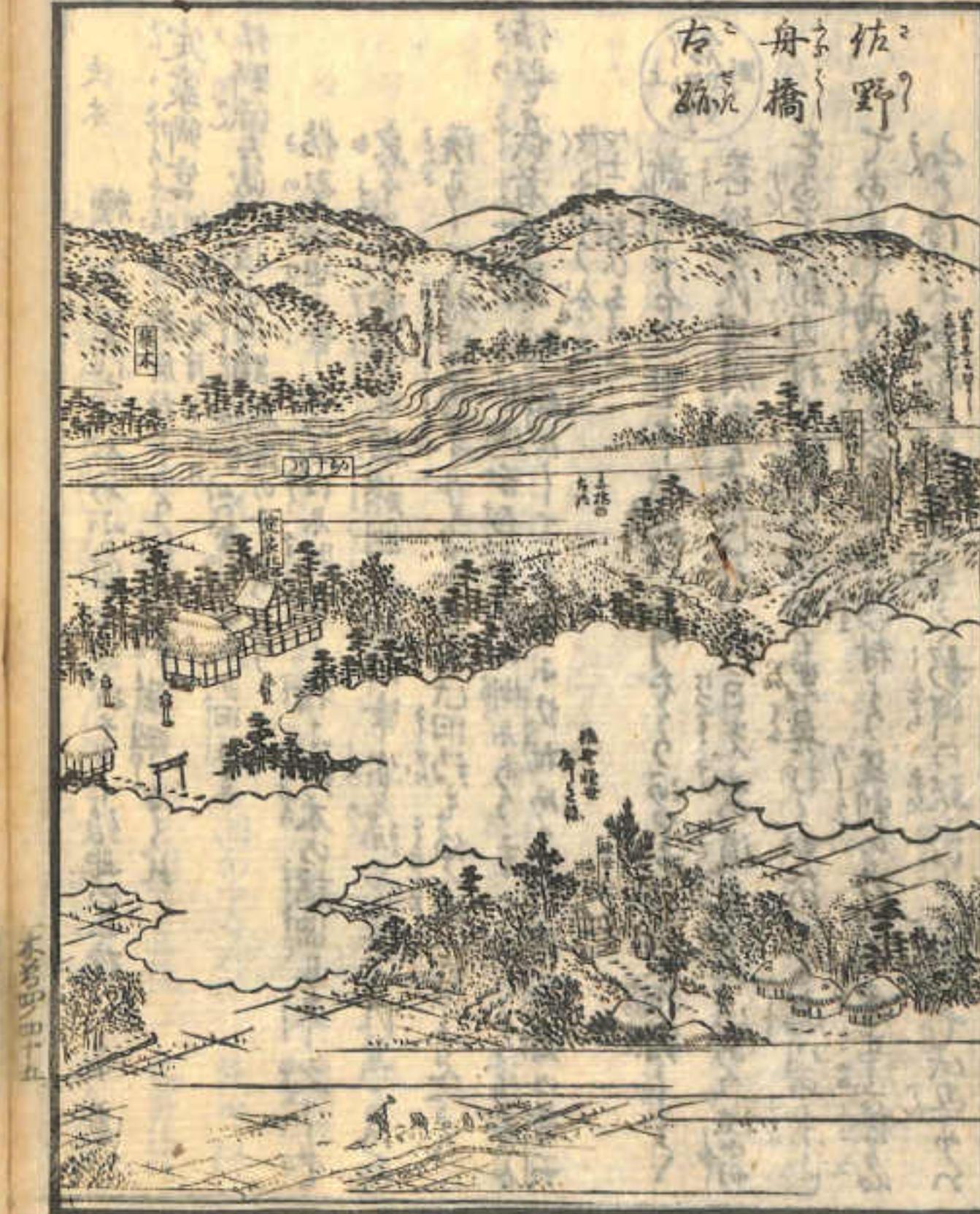
倉加野

上野

佐野  
定家社  
恒世贊



舟宿  
佐野  
古跡



園小素が裁家宅より多く蠶生をひきみ鷹をさわこんと見て  
徐然標功を積く猪小嶽が唐の玄宗と宮中にく轄を書下し  
婿きて女工の事が如じし武朝もと應神帝時代久安服鐵  
婦の二女ありてあれを教く宮中もとゆも多ひ一女あり

特勝  
赤虎坂

勝頼其日の装束より高衣より京代の腰巻は後の胸鐵をやされ  
自然鐵の毛笠をもよせんる猪小嶽と勇車服又市布  
一宮左主全人の方面小え塞て迎せ敵とすほも追廻の邊に突  
合せまゝ世をわし取ひ便に城中に組め引退くと遁うとを追端付  
入に早城戸を立合をく外城の内門に入生弓服又市布奈近んぐ  
故六人を相手にノ獅子奮迅の怒をあつ四方にあて號説ふ一宮  
左主御体門を押破て左主をと又市布初を乞け因  
縫うて突合をうなが左主竹トニヤ思ひ久引退んとすが又市布を  
日陽が見捨て引退る如象山や威だらん矢只の伏せたを犯して免

らむと公卿づりを取て通を附よ清見中根石黒源も張本ア吉  
力を城せ滌脇よりも少く少土屋熟義より字に城門小東近の者共  
猪勝負小様との門内木直を余へ去塵熟義一馬主と名ある  
者を原隼人佐土屋小先を越らぬづりを押續く秦必勝がお三  
人と渡合せ猪めぐらの天晴ゆしくぞ尼くうちなる驍別先方の日尾  
聯左近も手入れども又市布傍多小素一を日尾辯と其陽ふ  
本院の足利れひ熟軍一が本素込を手うち城表拂を失ひて今  
猪らて本丸入りれば附味方も鳥羽体先幸丸の素へんと兵備  
たりと猪勝頼公も余入をま田安房守も素込を差本幸丸を  
水の手廻れあひる人をあれ小氣とけんと唯堅固ある幸丸と余  
彼人セ勇近じま田安房守これ孤考今幸丸の座城抜んと向ひ  
あくねの手底をよこせ攻め外の城兵大木狼狽して方侵を失ひ  
てせひく母なるかくくと

新町

上

幸市まで二里あ駄六七町ある

金鑽

明神

祠

祭神素盞烏尊

其外末社

大四神と

天瑞宮

宿禰

天瑞宮

金鑽

天瑞宮

上野

武藏國場

あ

大根

木

本社

宿禰

天瑞宮

宿禰

天瑞宮

宿禰

天瑞宮

宿禰

本庄

武藏

其外末社

大四神と

天瑞宮

宿禰

天瑞宮

宿禰

天瑞宮

宿禰

天瑞宮

宿禰

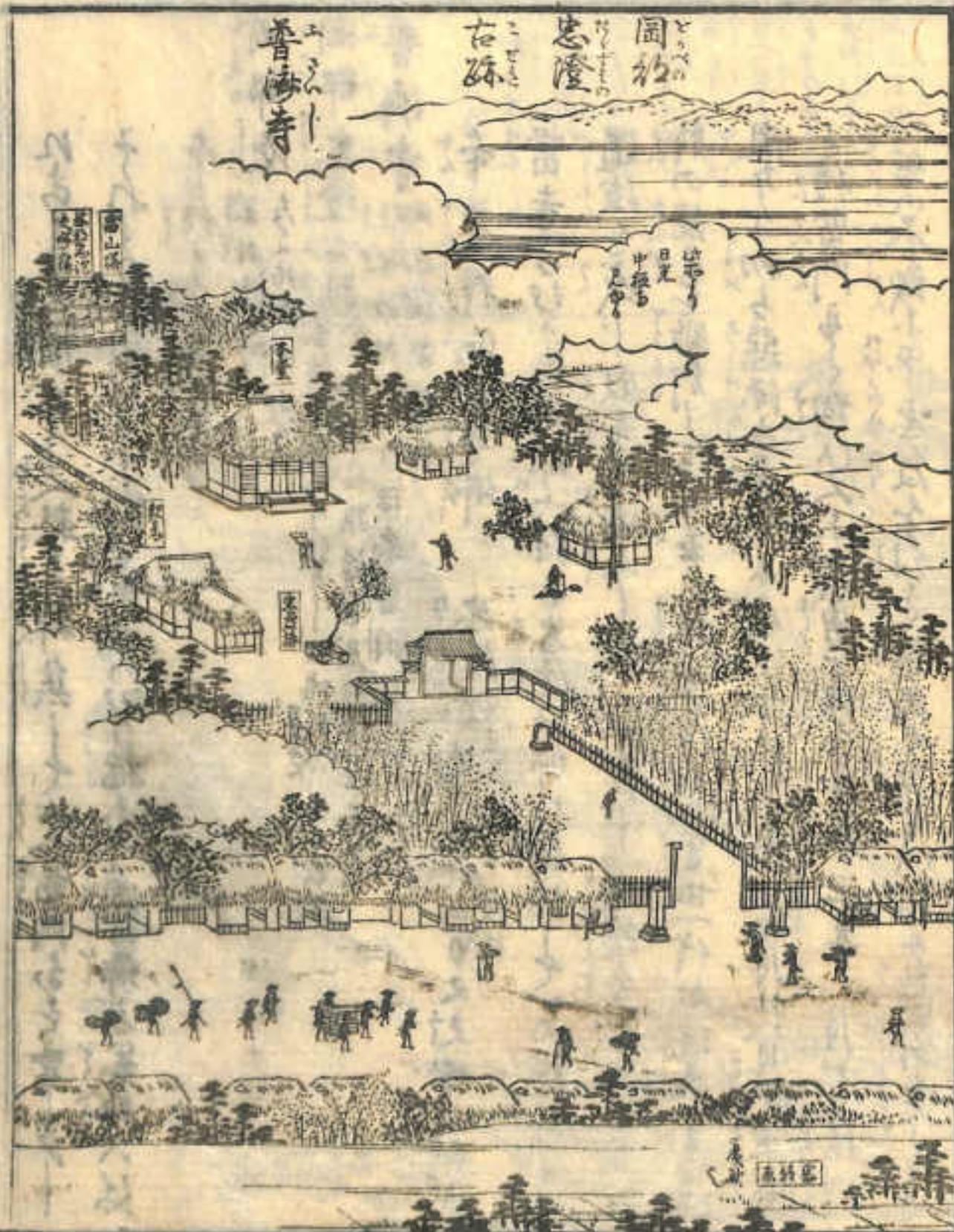
天瑞宮

宿禰

山伏川をワラリカキも宿がふほむる神より  
左の方赤木と見ゆる石峯山伏神よりは新立場へ晚念寺  
村名よく小説村のすばらしき所もうかくこの道あり左の森の中  
あすを金鑽の庵へめあう

源吉まで二里半九丁目伏民居三町ばかり相対  
巷伏あん祇園の神本あり六月廿七日奉寫

幽伏をまく傍尔堂村上列武列國界の標あ伏達ふ敷ふ名



にあく本丸市あり人殺しき群集して交易城ある事多  
そひり詫問ひし小門常より橋あり岡の郷と号す六  
をうなまゆる

岡部原  
寺門  
あり

普濟寺

同上

村

寺

山

朝禪林

谷

</

忠度の未だ五色と忠澄不賜へ忠澄武列秩父郡秋葉村より山廬を  
穿ちて石室が宮と自縁孤石壁よ開外 基層小祿院と建く

忠澄菴と號を又武列榛沢郡岡部小往して岡部を名すと  
墳墓が葉たゞ忠澄靈神と傳き其外良徳の古懷ねぐ

而も宇狹法師行御のとれ山嶽よしふて懷慕のわすば無く

なれを向ふ是れれ手の古廟よ松風を吹 宗教法陣

忠告まく武里二十町ば駅六七町併民衆相第一

巷底みん傳々左右よ散在し

親音堂 東園坊碑あり其碑本日

戒佛法事へく風移ふそく東風移

景園坊

死ぬ幸翁初めく死ぬりやうのえ

祖園

本居四四九

は張公乃ゆけ大本の松むゝ多く道の幅も廣くて妙に  
は府界邊境を走る東方ひし新都村より立場を筆石あり高  
柳を西く後掠新島村ある柳木ひし公原く市原ひし  
よしと鶴谷の原より

鶴谷

鳩巣まで四里八町ば駅二に町民家相対して巷とあを傾へ  
左右も附わつ至つて循じた前へあれより秩父山へ三里半  
は鶴谷島山ともよ島と重忠の因趾ニ成のめし戸口を島と  
十六里鶴谷より辛亥へ二里半南の方を左永井へ小二里半  
あり三社を御殿別當實盛を主として跡へ是を里生ゆれば宿

に赤城の神の所へ遙あり

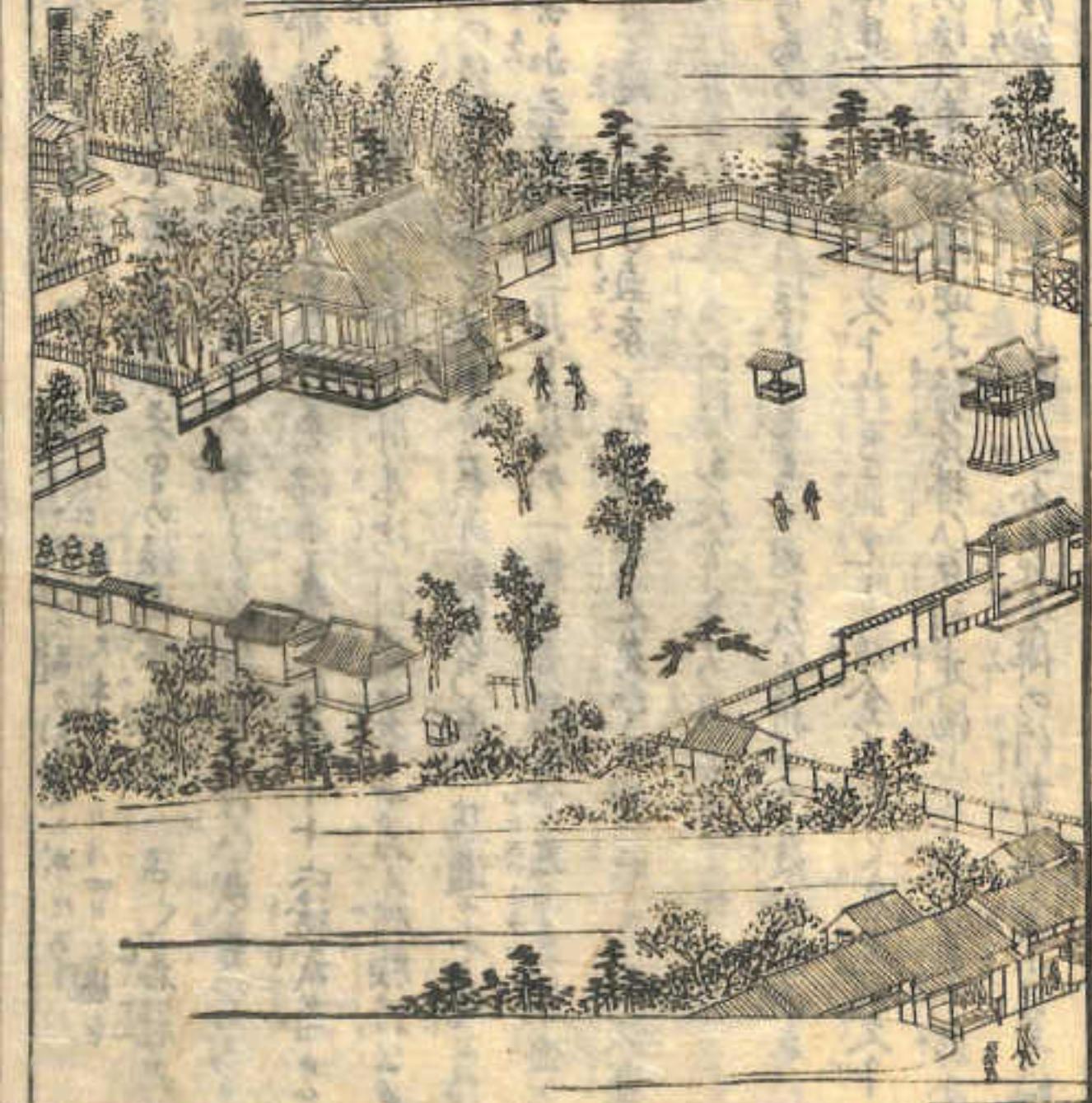
蓮生山

鶴谷の宿中にあり宿太家

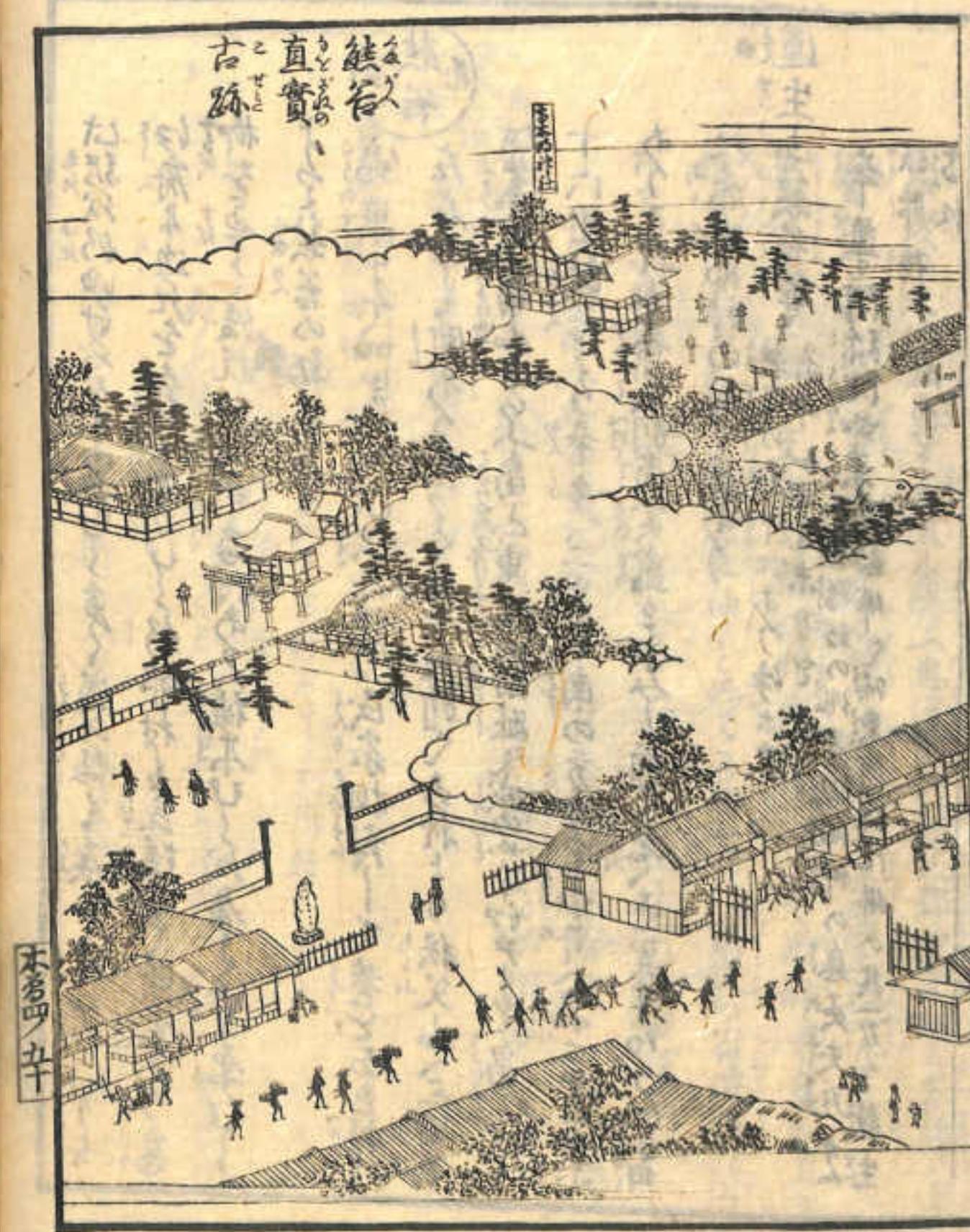
本居

門殊陀如来持主佛く海東門殊陀佛の其なり蓮生

寺  
熊谷



直  
熊谷  
古跡



蓮生法師本傳

同墓

丁未年四月廿日と識

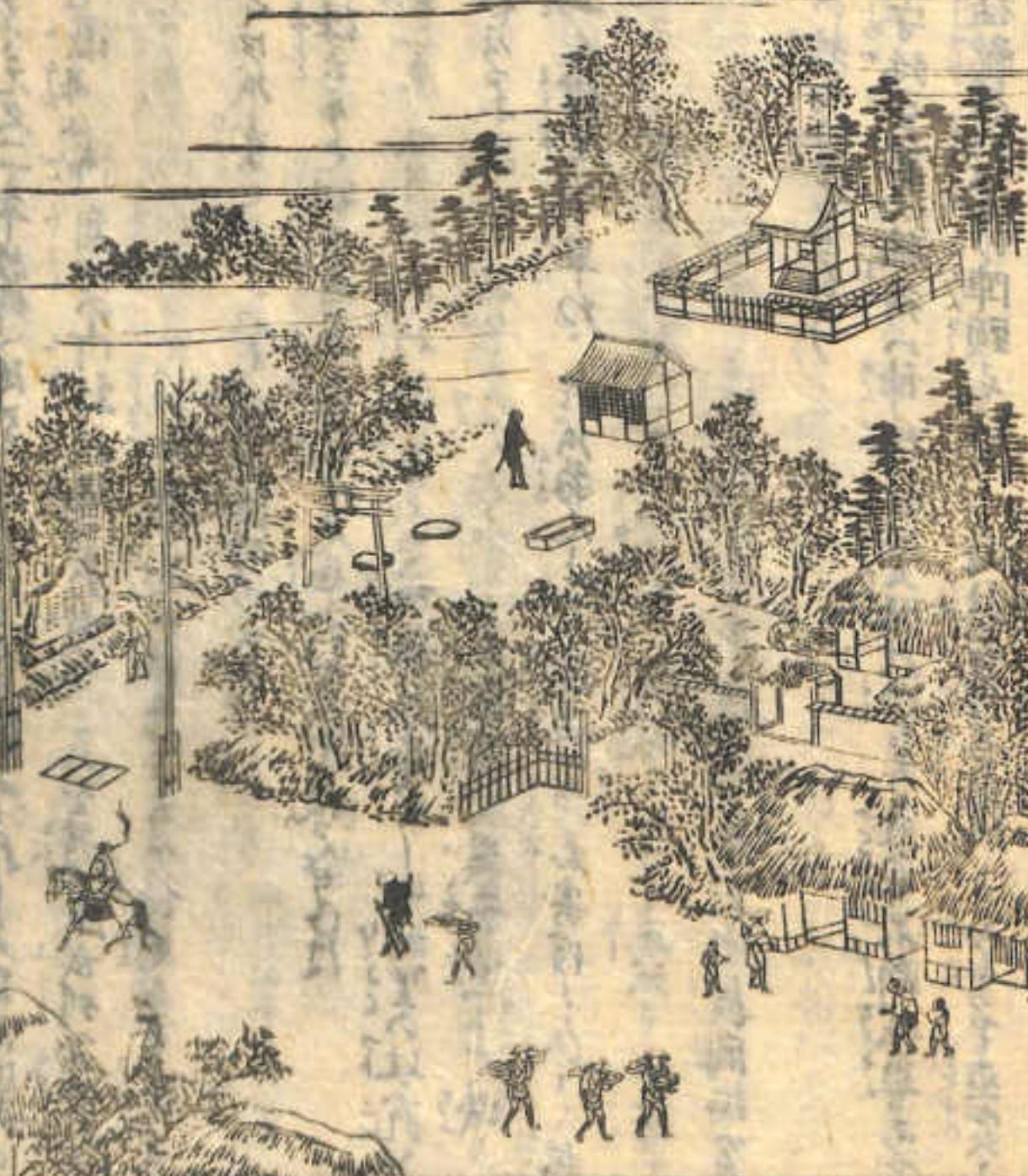
抑總若布直賓も極武天皇の後胤平盛方のふく君冠内  
とん開東に妙心寺下直賓の聰もより成長是時へ武勇つらう  
うて都待候門の合戦より更ほき承平に属一十六騎武者を  
植とす是石橋山の合戦外本馬の恩義して右大將頼公を  
苦小姓の役替へる幕と為外と其の勳功の威徳立通にて賜名  
其役表承三年甲辰二月七日檢列一若乃合戦小ヤ友吉支敷盛と  
討く肩と賜て吾子直家と殿陽坐て身外の一付の想よつて敷盛  
の丈母は秋山ひもよろちのけづいたをつゝり且其手挽を解ひ  
其身う馬の家はすれ建生の忍とも思ひてお前より夏令のひ良代  
そのは建久二年のを久下持ち直光と深金よがくま花園久下  
越若の境北平治の後遂不整ハ拂ひ豆列走陽官より入笠年御  
登て法華上人の御香予とめり二公より念佛の行者とぞ成小字長良

舊址

渡急綱

八幡宮

其田村



禮也と元々二年故郷へ歸るより上人本願より一六自画迎候の  
曼陀羅寺にて自化の仰教伏賜アシテ蓮生らを送り、武列へ下る  
附不育西方の行者とて後初歩とあがほトモテウタハ馬もと運よ  
すくばくませるもを蓮生活作のあれ

建大寺と劉の著も沙はき人あもしらず後をせひ日

建永二年九月四日午时往生をき佛勸があらうセ村里のはれと  
寺をタス不黒ノテ其日よ因人さやまも樂聞く異香薰トテ眠ミ  
方立く往生ノ卑ニシ新谷翁人とて遠近の老若寄宿トヒテ相  
麻の下ノ紫雲が多庵のよ止所半時後アリテ西城ヨテ西城  
より一石生の靈瑞く後世又正平中惣隨意丈中奥用起有  
今之然若寺ニモアリ

頼守院三左衛門稲荷ハ神伴弘法大师比沙門直寔不斬伝尊アモ  
て猛獻於討魔け陣頭耳向う一時然若院三左衛門と名をアミ實小

力と深致ハ小勝利とゆく特不一若の合戦も太年の先陣本向人等と  
利モたゞひーに彼人付随の加勢外モ未けれ候り凡不思議テ不眞財名  
次向が常に汝が信を訴の捕焉の神ニ多難と歎人アハ然若院三左衛  
門院ト名こそ忽其あとと慮レ申テ即居跡に宮舎を置くニ神と  
宗主先今あ山ル總守トマヌ

高山什寶

放光名號

和放名號

斧齋名號

彌陀三尊

御殿光大師

直寶而持母衣旗名號

因真筆

阿弥陀佛

普上寺學參入信正室附

裸形彌陀傳来

迎接曼荼羅

蓮生所持

後

肉玉珠

三尊書

固光大師真筆

金珠

鐵臂

征

以上

蓮生持物

十六面六臂

十五遍名號

蓮生華

因光大師真筆

不動光佛名號

幅薩意上人筆

壽牌

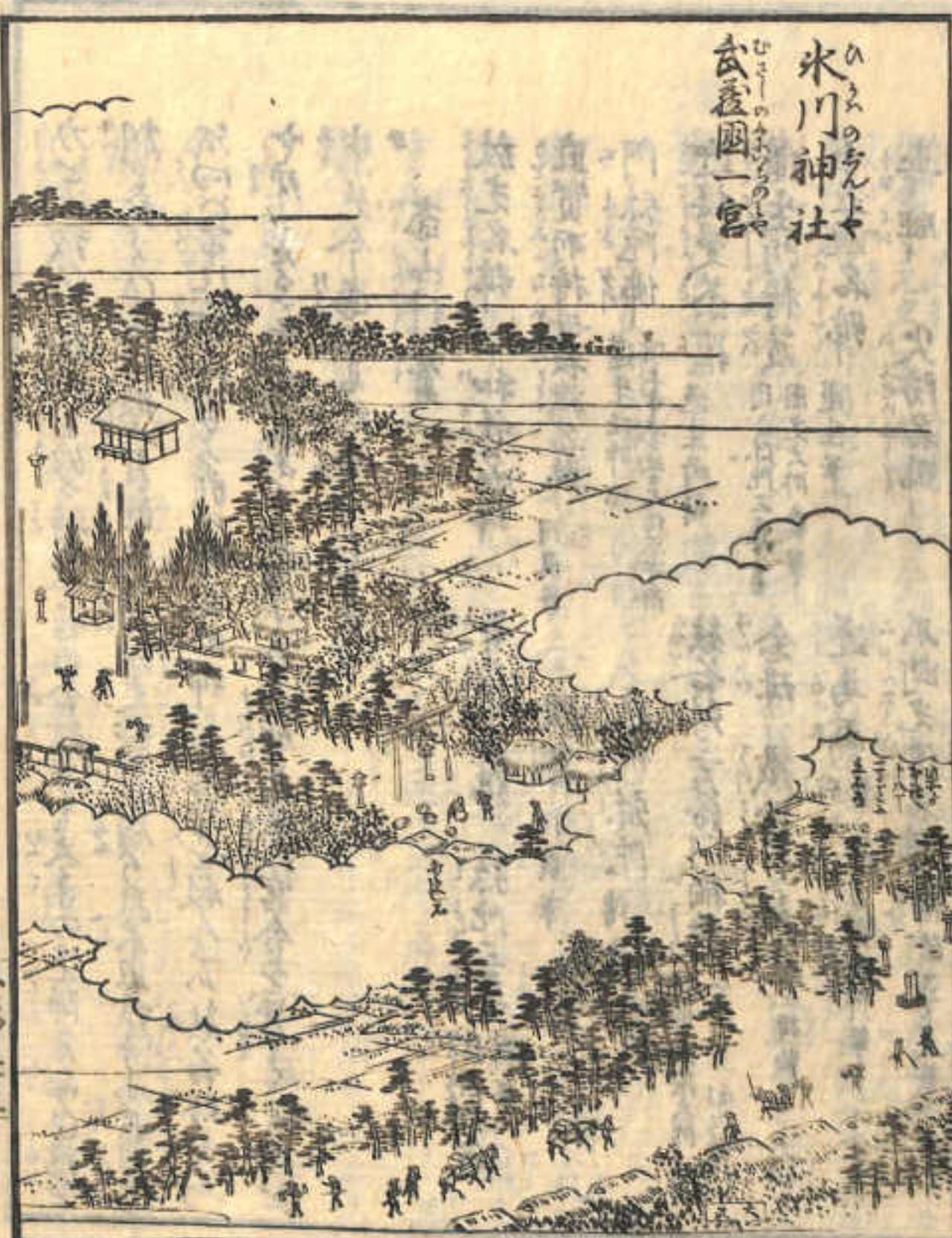
火防名號

不動光佛名號

幅薩意上人筆

氷川の元より  
武藏國一宮

ひざいのくもじらわ  
むさしのくにいちのみや



御製懷珠數子孫置狀

三

平生詩集

卷之三

卷之三

遺生詩集

萬  
時  
常  
居  
城  
實  
直  
吉  
然

卷之三

寶居城

卷之三

卷之二

二  
加  
直  
實  
省

治承六年六月五日甲辰熊谷二郎直實者也  
勵朝夕恪勤之忠去治承四年追討佐竹冠者  
之時殊施勲功依令感其武勇給武藏國舊領  
等停止直光之押領可領掌之由被仰下而直  
實此間在國今日令參上賜件下文云  
下多  
武藏國大里郡熊谷次郎平直實所定補

所領事

右件所且先祖相傳也。而久下權守直光押領事停止以直實爲地頭之職成畢。其故何者。佐

汰毛四郎常陸國奥郡花園山楯籠。自鎌倉令  
責御時其日御合戰直實勝萬人前懸一陣懸  
壞。一人當千顯高名其勸賞件熊谷郷之地一頭  
藏成畢子々孫々永代不可有他坊故下百姓  
等宜承知敢不可違失

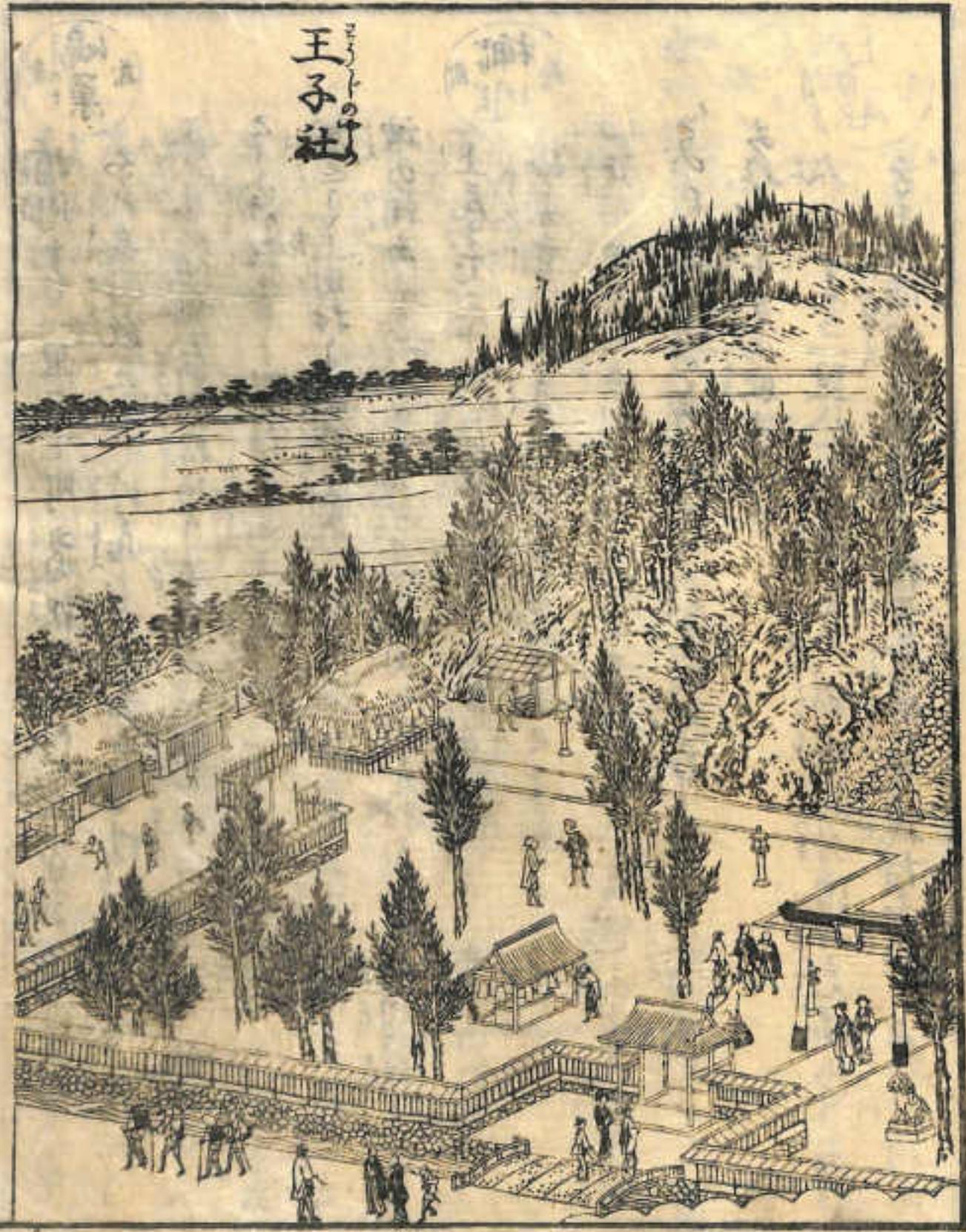
治承六年五月卅日

吹久

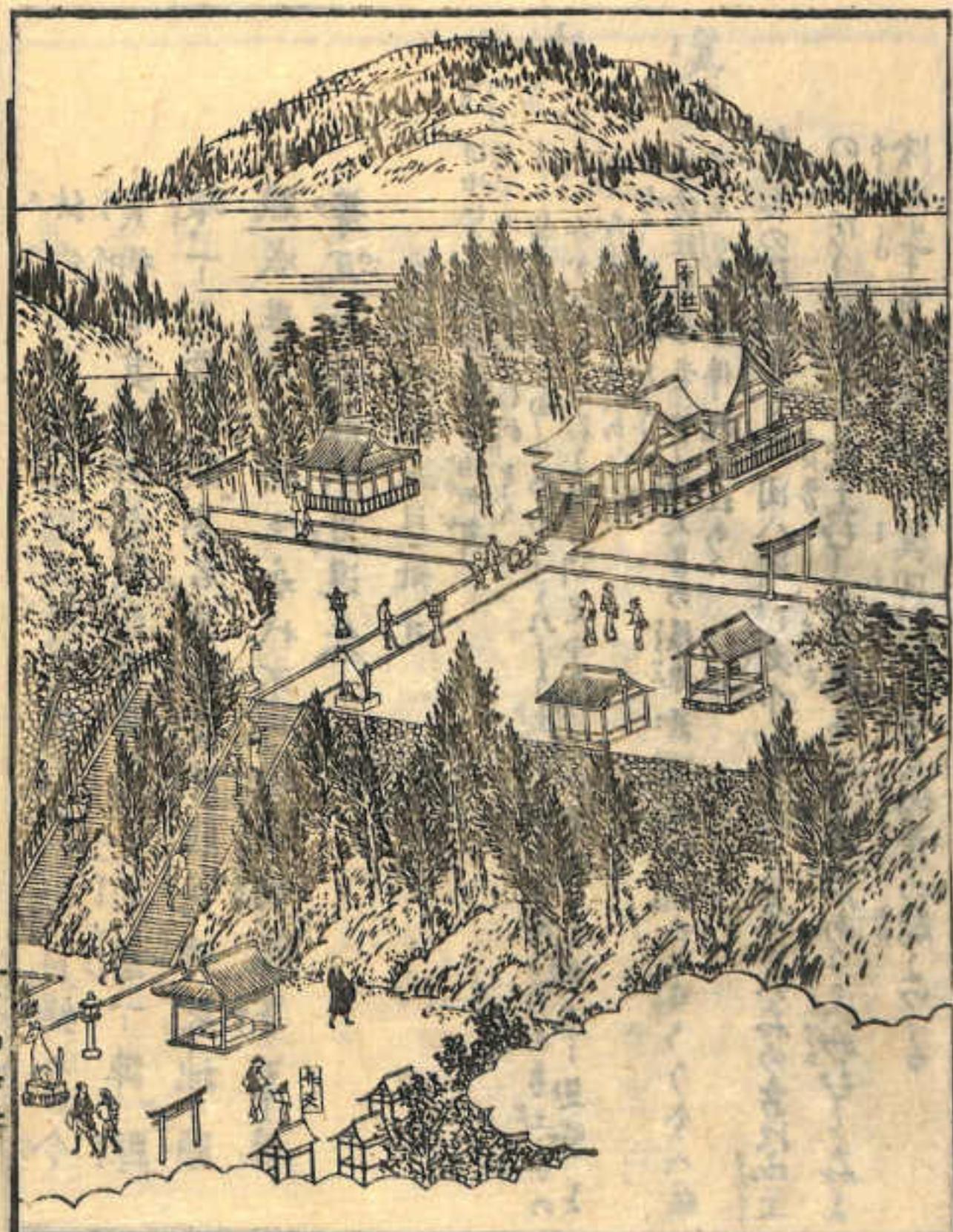
卷之二

久下次年直光が住跡を  
ばる原山王の御城あり。土木はとて重く、左のあづまの  
トヘノカ所たり。右に川足より吹上の東屋にて居す。里錢を  
あつた。御の城への  
乃め一里ばかり。  
源氏の御城。其の古御院は今八幡  
宮本主。念佛院は社主。  
鶴巣の御城。主く田八幡村久下。右に山王  
の祠。右に山王祠。上むへ立場ありて。茶店あり。またも右に  
宿間。峯見や中井村。箕田村をもくはり栗の駒。よつる。

王  
子  
社



不  
う  
四  
辛  
五



鳴  
武

桶川まで一里三十町處 稲三に御 民家相對して巷を

あは甚解散車にて經店へる宿ふ葛峰の神の御所何

又大木の杉林大竹の林うち左の方に鉢林希日光也の通宵又

うふ勝願寺と云ふ在小十八檜林の一ヶまわり東アリ三軒茶屋

がゑと上田村より雲作業あら又清間官立ゆへえ鳴巣よりよえ  
神の祠あらま門寺あらもさく新田や久村をみて桶川の駅より

上尾まで三十町西駅三町をり民居相對して巷がわん宿り

済念きよりまあら又岩井の道こうふあら

けひびく脚盛村南しれ左よ庵村右よ雷電山とて林あり

この内よ雷電の御一駅あら門本村半をく瓜をだ畠村と祝喜業有

あれもう上尾の駅よつる

大宮まで二里八町半駅すう川越道岩舟道日光道あら左の

方下流同祠これ秋色く船方附絳むら梶村を廻く賀茂村下

不<sub>ト</sub>四辛酉

武

桶川

上尾

大宮

水川

神

大宮

賀茂祠あら音盤村か草村土多町城邑と大宮の駅よつる  
浦和ナで一里十町宿の入つる

東光寺とく禪刹あら

女軀社

大宮の駅よつる延喜式云足立郡水川神社名神大月吹

五山祇社

大山祇中山祇

萬山祇正勝山祇

金鑽社

手摩乳足摩乳

金鑽の神所

冰川王子社

神池の傍小河

冰川王子社

大巳貴今波妻

末社

住吉社

布留社

神明宮

不動堂

日野ふぢ

神樂殿

池の東にあ

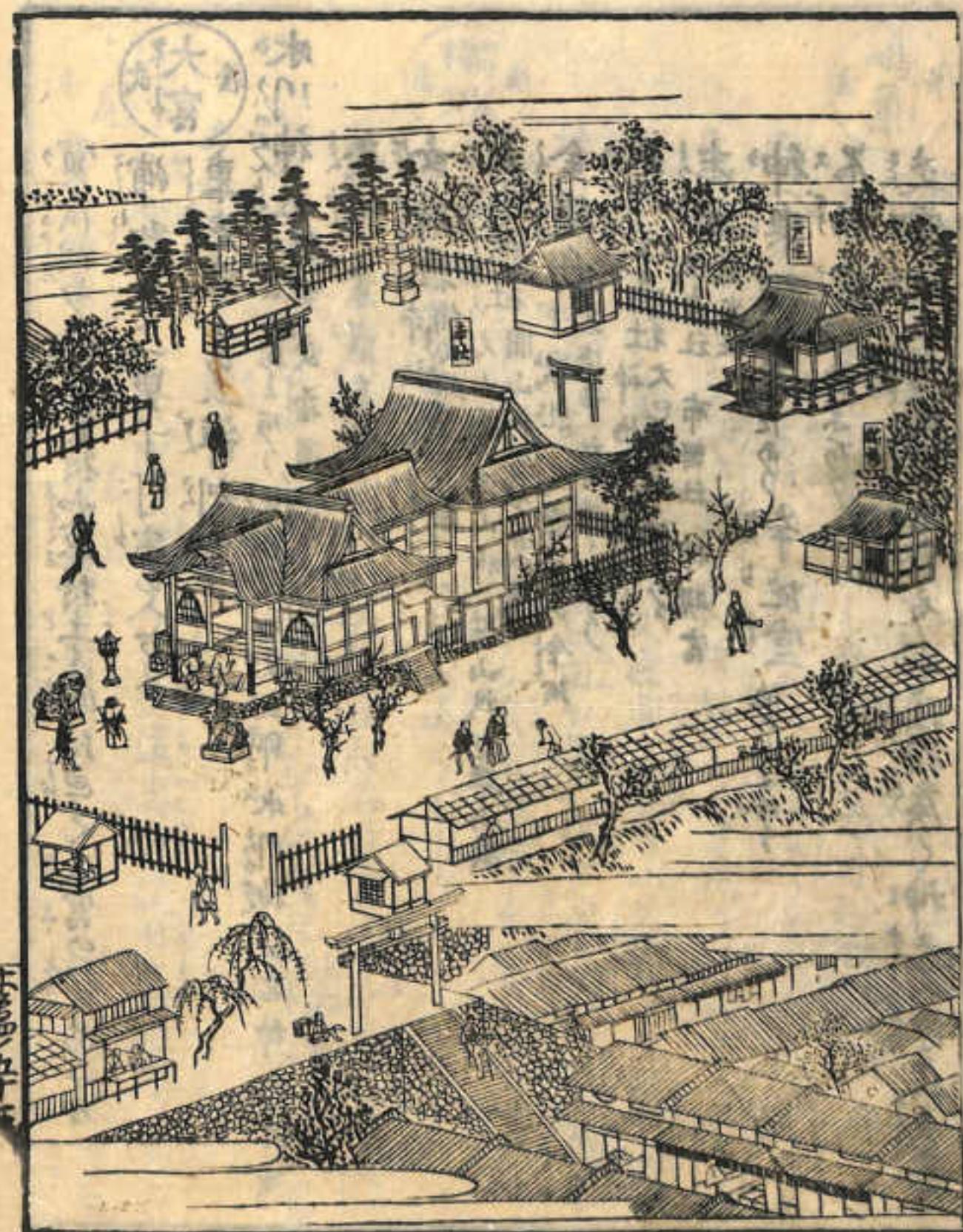
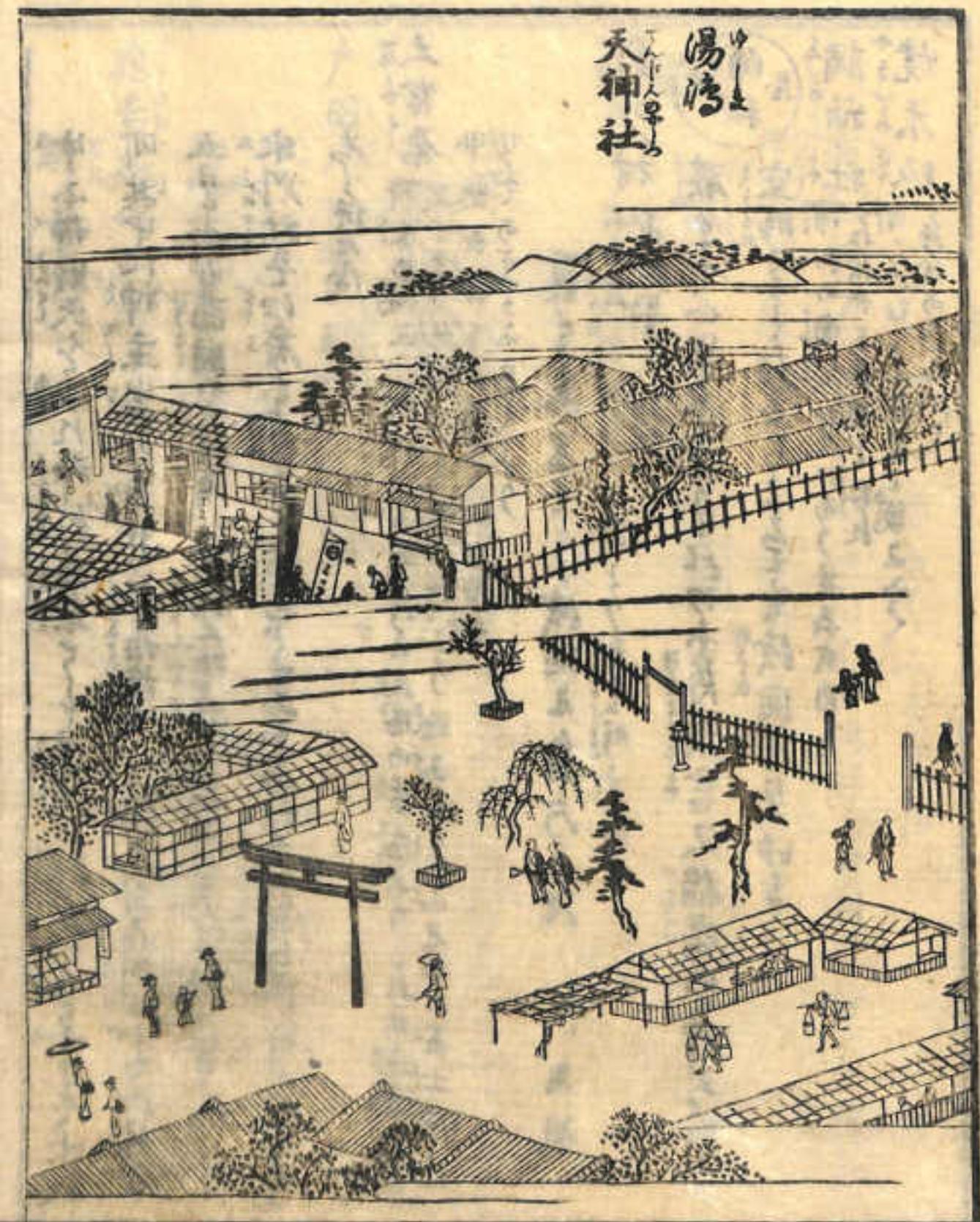
奉地堂

池のゆよぢ

支當社

大國の二之宮

て社頭廣く神龜の池多々石橋有



中 小辨助天を安ん神於森並らて並樹の松原一も疊々で十八  
町 其中に神主岩井角井を居候一社領三百石例を六月十  
五日より西國の入社りて諸人陰陽を燎ひたる不織事あ  
氷川社是に處奉ふまく而思ふやうに御社を訪候の御神事とぞ  
有り

### 大宮原

野栗の間三十町併あり中程よ轟場の栗宿ありこれ松六町同入  
久木下二十町程の前より地頭の高山足ゆる武士宿同  
甲斐武田氏時上列御警保  
なりやあさやうふ見くうり

### 針

夏も嘉義士より減間ふ梶乃さん  
馬明

浦和孤立く岩むとと白とと村林とせ村过りし先越此  
樟洞の中落あわわびと村ばとく蕨の根りゆる  
空晴くると死きこととも減間ふ見くゆる  
調神社 潤和の廟岩むととあり美衣式内し  
燒禾坂自とむと小枝本と鐵屋今  
蕨すで一里半ひくはほ不月殘宮又稻荷の廟うらり

### 浦和

卷

### 蕨

中丸木や麻きく人木多  
浦和孤立く岩むとと白とと村林とせ村过りし先越此  
樟洞の中落あわわびと村ばとく蕨の根りゆる  
松橋すで二里八町は釋民居六七町あり松  
戸田川二十四町あり

名を廻てワヒト中丸里かう那

豊成秀曉

は驛をすくえりと危の壁余伏り戸田村とるい川萬  
子安の釋迦へ宿をか道あり

### 戸田川

轍敷い川上と入戸田川へ

此河をすくま村より下ふかしん坂あり下りて小室庄内

又北義坂をあそくあ川次村清水村より下る蓮沼しるは  
猿吉宿の廻り宿ありて又小坂河あそく縁切坂より松橋の  
驛をりる

馬明



武  
極  
橋

江戸日幸橋まで二里ばかり牛込道の東橋にて町十間牌あり  
前へ小走鬼店本郷ひ紅梅を植へて花替がうへぬく  
美色をかうる格子のうちゆたゞ旅客もあとで見くあれを主  
孤と見るも多し

摘要

因ひのちりやむせたれめう街河上は流を立章

頬政

平塚山神社 极橋の隣の方平塚山本あり

奈神 八幡を祀る家實元治即義卿勅羅三郎義光の三靈を

禮塚 本社の隣本山より利家の體を

山川城

宿院金輪寺

とよ

王子社 東光院金輪寺とよ  
祭神 祇野二所神

一本島六十

稻荷社 寛永十一年官家造立本造春其記を刻に御祭七月  
十二日寺中十二坊頭を參れ  
龜鳥山 稲荷の頃と雲と見て雲と觀ふたよ様も神志をうる  
匂ひふ處れ夜め化すく家移居あくとまうりた

壹鳳苑譜

風の匂く動ひ雲と見ゆるが先の事あらうの盛也

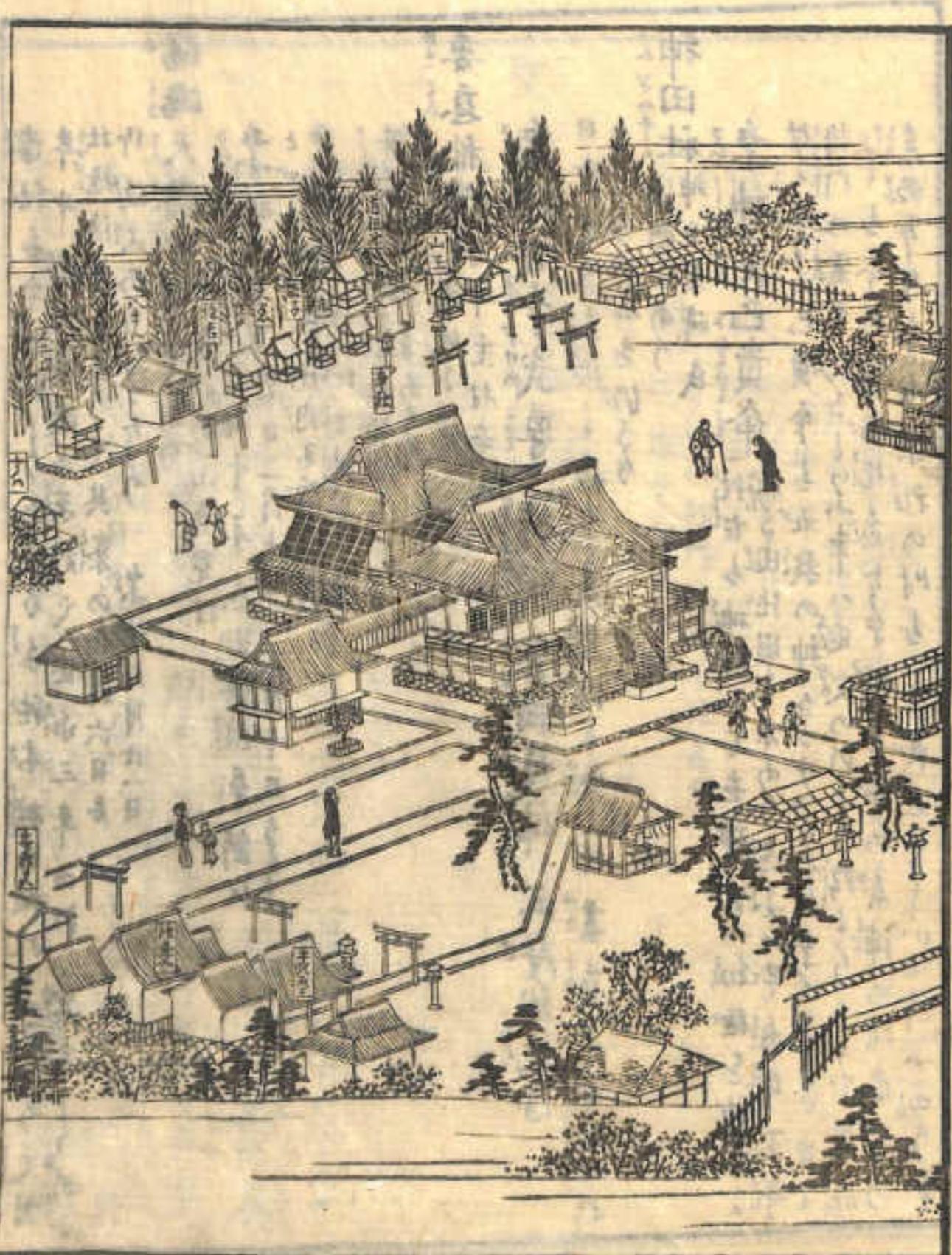
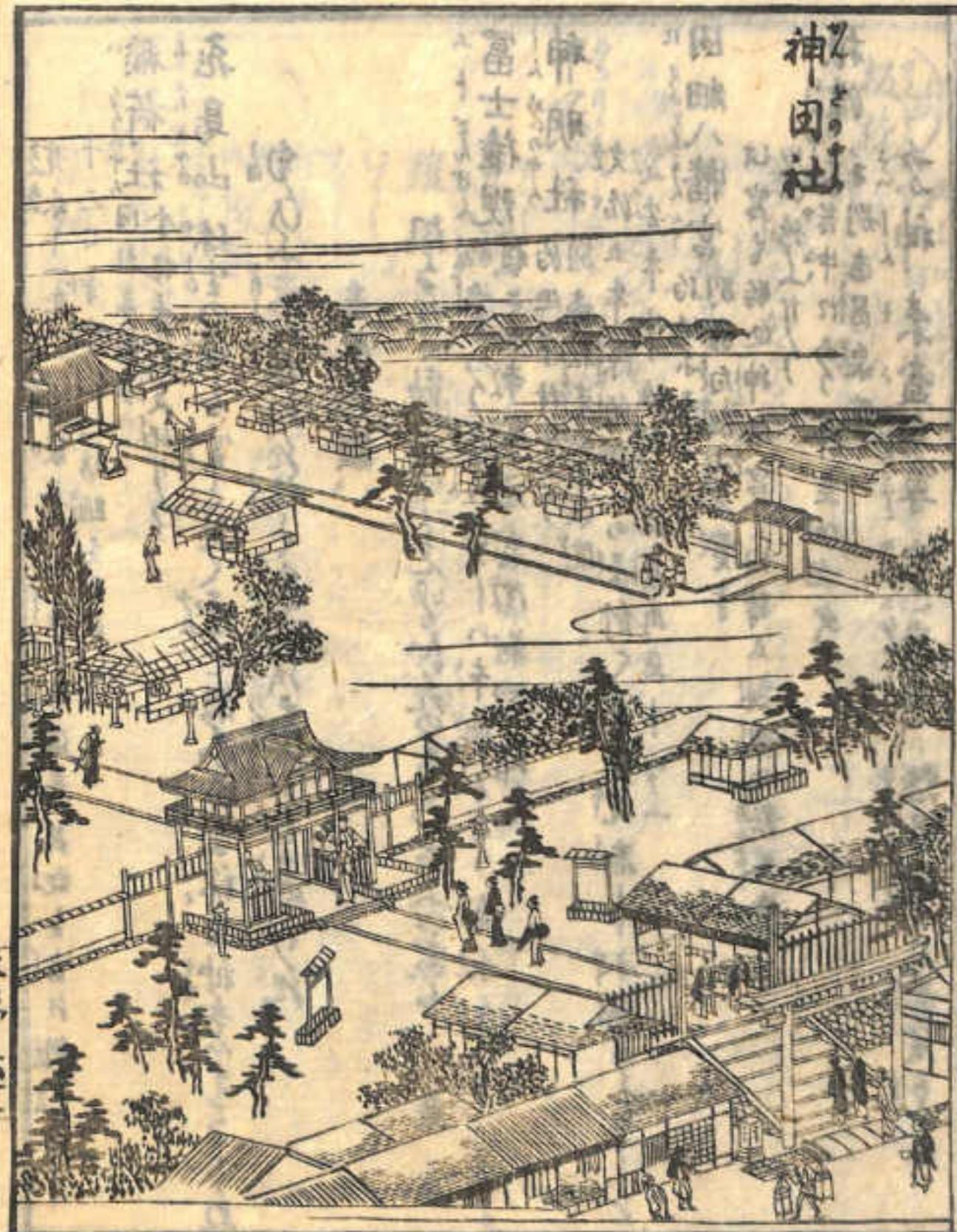
蘿庵

富士権現 寛永九年本造元治元年中山地  
神明社 別名松光山大泉院

固畠八幡宮 別名向龍山東覺寺  
は宮も駒込神明宮とは時小幡朝の御跡也

根津社 別名高麗院  
素神 東盃烏尊 大己貴命 桂子命 三神伏見也

神田社



湯鴻

見  
賢

三

四

柔神 菅公 文明十年正月通禮  
祭日二月十日 十月十日

後漢書

宗神 日奉 武尊

神田社 湯清小あり  
神主菱清氏

衆神大已貴

卷之三

聖

堂 湯治昌平坂の上をあり  
祠 夏幕の林家三才とす

文宣王并十哲を紀也

行  
序

御高門 入德門 善體拘忌も觀あり

卷之二

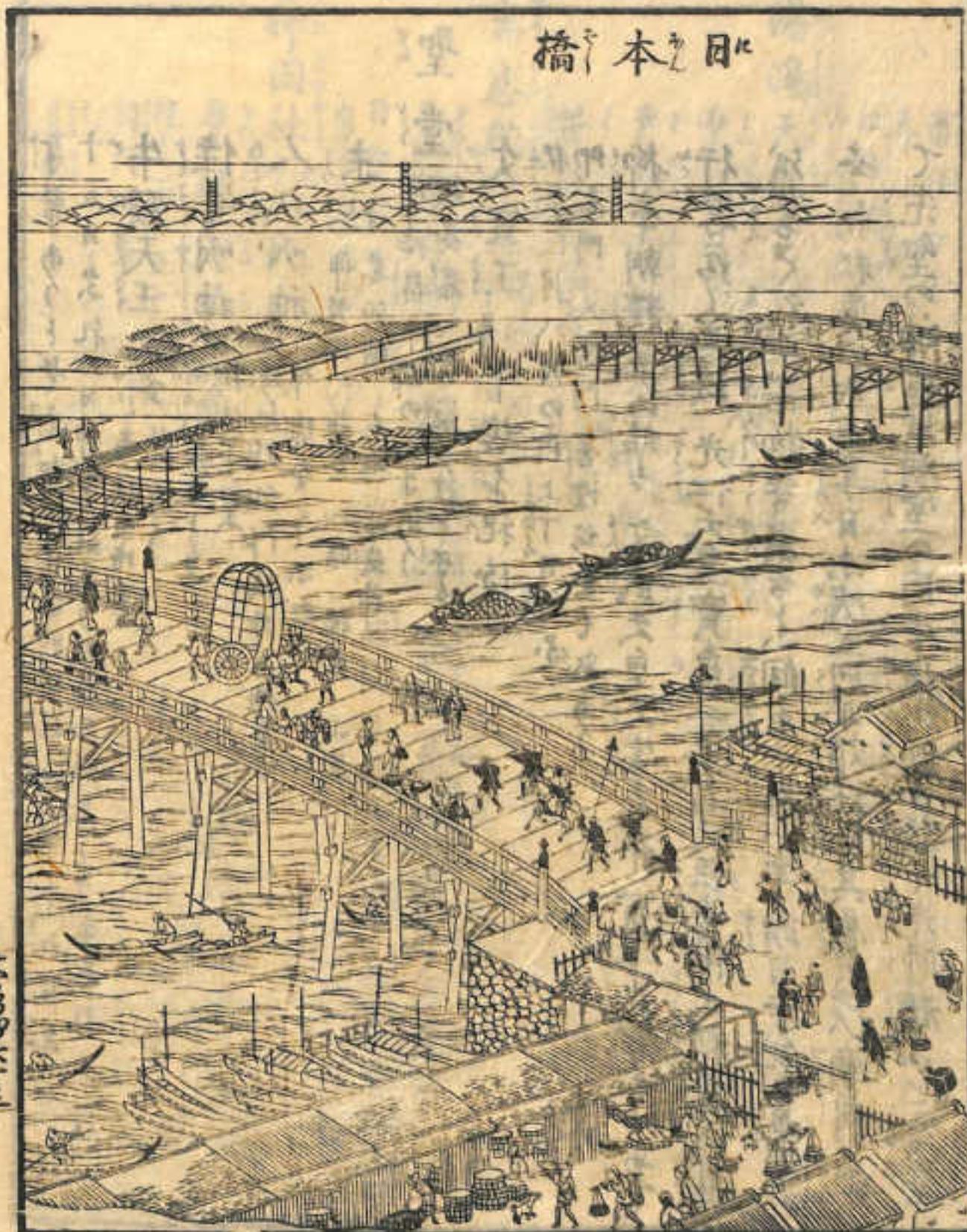
行ひせゆる甚後

光仁天皇寶龜二年

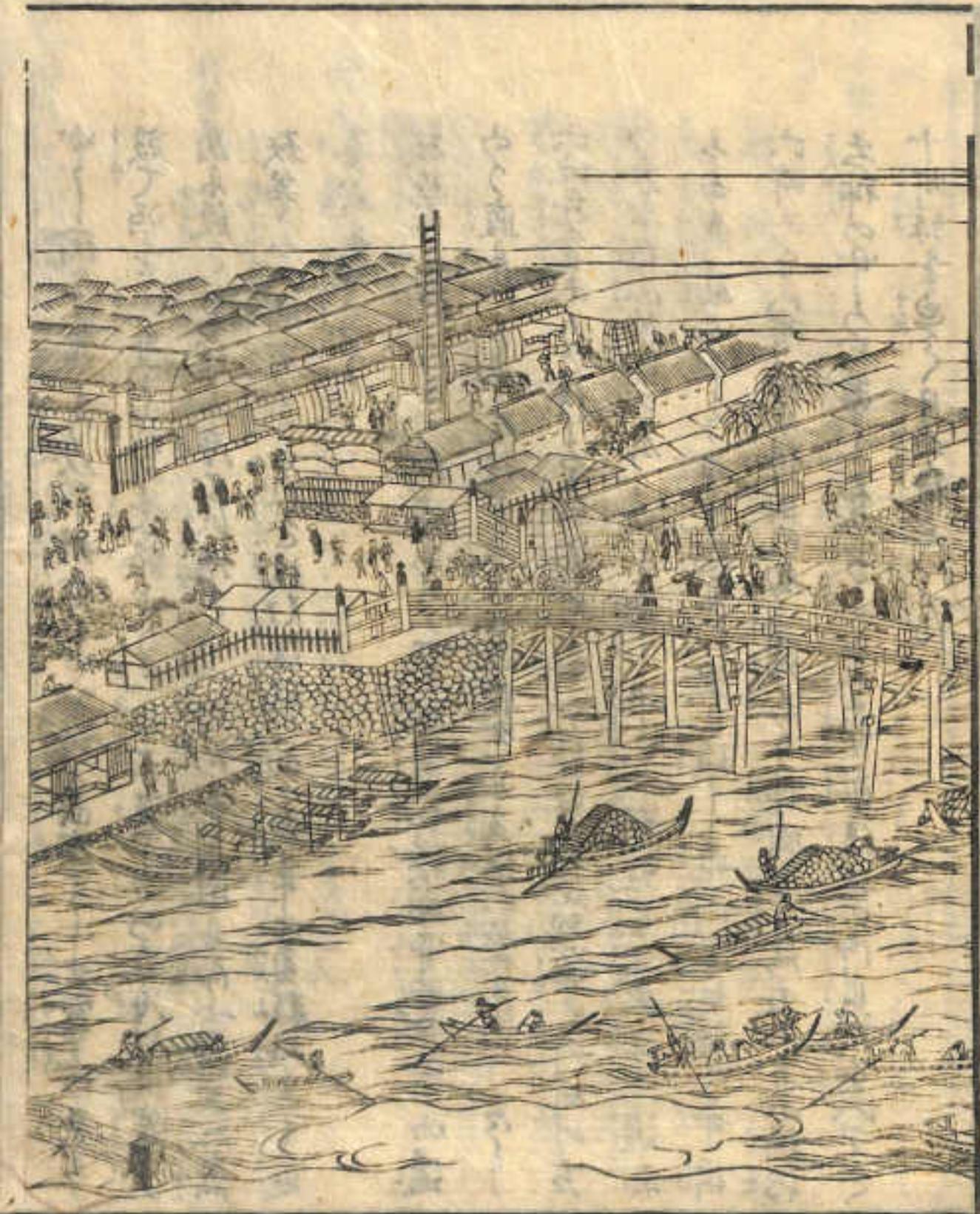
右大臣吉備公私奠の奥

弘誓ノ御典器物等、奉事の御事、  
本朝承眞の式と享日未明五列本郊社令其屬及び廟司と率  
て先聖の神座が廟室の内中檻の間より設く先師額子と育屋

日本橋



本居四六三



ゆく園子騒より以下興有すと帰る四座より文宣王の東西  
設て西を上座とし又東路より已下予夏坐の五座狹文宣王の  
西も設く東北上座とし候く十一座何とも南より向て其外魚  
穀等より六衛府よりこれを進む陳設の品々執事の貢穀何とも巡  
喜式奉詣あり

板橋を下りたる栗川越道あり左に難司谷護園寺山谷よりの通  
あり直木沢を平尾村を下り栗鴨町ふえ場の集落あり下り  
六地蔵堂ありこれより駒込の町より西へせん窓汎と竹町の左  
の方自山推観の庵一庵を越へ追かる事立石岩側日光道右  
を幸洞庵を下り日幸橋を一里よ過へ森川宿が通て幸郷  
六間あり八町因幡神田の庵一庵あり神因彦齋左の方小陽信  
天神のゆうが庵一庵の方ふき堂堂筋遠橋の所見附をへて  
十町を下り日幸橋を下る

本盈立益

日本橋  
ひきの旅宿かひづれ一両日程すくら候り總く身のりて  
たくの旅跡が色々の本領にて所もとあねて神清乃  
原一秀吉の神社息栖の神と號して原宿にて船もと下て  
身をあ二日逗留して神社名所が先づり又船より延方にはく  
板久牛込をと麻生瓜併く船益も宿も玉造をとく小川舟中  
行母成るく小畠より十二塚と號すと篠波山少僧より  
の説めとけて日未山よりのよ中経寺二萬一千より登ふくうきを  
塔の毫より記す

新古

武夷山や行ともれの累どあたりらず風のまほん 通光

行未ちやをひづれ武夷山をあらむ月桂

桂殿

新證搭

